

邪宗門

北原白秋

青空文庫

父上に献ぐ

父上、父上ははじめ望み給はざりしかども、児は遂にその生れたるところにあこがれて、わかき日をかくは歌ひつづけ候ひぬ。もはやもはや咎め給はざるべし。

邪宗門扉銘

（こ）過ぎてメロゾア曲節の悩みのむれに、
（こ）過ぎて官能の愉樂のそのに、
（こ）過ぎて神経のにがき魔睡に。

詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ尽し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心霊の歎歎をたづね、縹渺たる音楽の愉楽に憧がれて自己観想の悲哀に誇る、これわが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尚び、夢幻を歎び、そが腐爛したる頽唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寢にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチツシユの音楽と幼児磔殺の前後に起る心状の悲しき叫也。かの黄臘の腐れたる絶間なき痙攣と、中オロンの三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子にうち噎ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の脳髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鷲絨の手触の棄て難さよ。

昔むかしよりいまに渡わたり来くる黒船くろふね縁えんがつかれば鱻ふかの餌えとなる。サンタマリア。

『長崎ぶり』

例言

一、本集に収めたる六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晩秋」の類最も旧くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。

一、予が真に詩を知り初めたるは僅に此の二三年の事に属す。されば此の間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従て本集の編纂に際しては特に自信ある代表作物のみを精査し、少年時の長篇五六及その後の新旧作七十篇の余は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き『断章』と『思出』五十篇の著作あれども、紙数の制限上、これらは他の新しき機会を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諧楽と感覚の印象とを主とす。故に、凡て予が扱ふ所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覚と刺戟苦き神経の悦楽とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作為するが如きを嫌忌す。

されば予が詩を読まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じその儘の調律に奏でいんとする音楽的象徴を専とするが故に、それが表白の方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嗤ひて甚しき跨張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと做せども、予が幻覚には自ら真に感じたる官能の根抵あり。且、人の天分にはそれぞれ異なる相違あり、強ひて自己の感覺を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本来、詩は論ふべききはのものにはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の単に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

一、終に、現時の予は文芸上の如何なる結社にも与らず、又、如何なる党派の力をも恃む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が独自なる個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

一、尚、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村両氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著者識

魔睡

余は内部の世界を熟視めて居る。陰鬱な死の節奏は絶えず快く響き渡る……と神経は一斉に不思議の舞踏をはじめ。すすりなく黒き薔薇、歌うたふ硝子のインキ壺、誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環、笑ひつづける空眼の老女等はこまかくしなやかな舞踏をいつまでもつづける。余は一心に熟視めて居る……いつか余は朱の房のついた長い剣となつて渠等の内に舞踏つてゐる……

長田秀雄

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世まつせの邪宗じゃしゆう、切支丹きりしたんでうすの魔法まほう。
 黒船くろふねの加比丹かひたんを、紅毛こうまうの不可思議ふかしぎ国こくを、
 色赤いろあかきびいどろを、匂銳におひときあんじやべいいる、
 南蛮なんばんの棧留さんとめ縞しまを、はた、阿刺吉あらき、珍醜ちんたの酒さけを。

目見青まみきドミニカだらにびとは陀羅尼だらに誦ずし夢ゆめにも語る、
 禁制きんせいの宗門しゆうもん神しんを、あるはまた、血くちに染くむ聖せい磔たつ、
 芥子粒けしつぶを林檎りんごのごとく見みすといふ欺罔けいこんの器うつは、
 波羅韋僧はらいその空そらをも覗のぞく伸のび縮ちぢむ奇きなる眼鏡めがねを。

屋いへはまた石いしもて造つくり、大理石なめいしの白しろき血潮ちしほは、
 ぎやまんの壺つぼに盛もられて夜よとなれば火点ともるといふ。

かの美^はしき越^え歴^れ機^きの夢^むは天^び鵝^ろ絨^うの薰^くにまじり、
 珍^めらなる月の世界の鳥^{とり} 獣^{けもの} 映像^{うつ}すと聞^きけり。

あるは聞^きく、化粧^{けはひ}の料^{しろ}は毒^{どく}草^{さう}の花^{はな}よりしぼり、
 腐^{くさ}れたる石^{いし}の油^{あぶら}に画^{ゑが}くてふ麻^{まり}利^り耶^やの像^{ざう}よ、
 はた羅^ら甸^{てん}、波^は爾^に杜^と瓦^わ爾^にらの横^{よこ}つづり青^{あお}なる仮^か名^なは
 美^うくしき、さいへ悲^{かな}しき歡^{くわん} 楽^{らく}の音^ねにかも満^みつる。

いざさらばわれらに賜^{たま}へ、幻^{げん}惑^{わく}の伴^ば天^{てん}連^{れん}尊^{そん}者^{じゃ}、
 百^も年^{とせ}を刹^{せつ}那^なに縮^{ちぢ}め、血^ちの磔^{はり}脊^{きせ}にし死^しすとも
 惜^をしからじ、願^{ねが}ふは極^{ごく}秘^ひ、か^かの奇^くしき紅^{くれ}の夢^む、
 善^{ぜん}主^{すまろ}磨^{まろ}、今^け日^ふを祈^{いの}に身^みも靈^{たま}も薰^くりこがるる。

四十一年八月

室内庭園

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

やはらかにちらほへるへりオトロオブ。

わかき日のなまめきのそのほめき静ころなし。

つきせざる噴水よ……

黄なる実の熟るる草、奇異の香木、

その空にはるかなる硝子の青み、

外光のそのなごり、鳴ける鶯、

わかき日の薄暮のそのしらべ静ころなし。

いま、黒き天鵝絨の

にほひ、ゆめ、その感^さ触^{はり}……噴^{ふき}水^{あげ}に纏^{もつ}れたゆたひ、
 うち湿^{しめ}る革^{かは}の函^{はこ}、饅^すゆる褐^{かちいろ}色
 その空に暮れもかかる空^{くう}気^きの吐^{とい}息^{いき}……
 わかき日のその夢の香^かの腐^ふ蝕^{しょく}静^{しづ}ころなし。
 三^{さん}層^{かい}の隅^{すみ}か、さは
 腐^{くさ}れたる黄^{わう}金^{こん}の縁^{ふち}の中、自^と鳴^{けい}鐘^きの刻^{きざ}み……
 ものなべて悩^{なや}ましき、盲^しひし少^{をと}女^めの
 あたたかに匂^{にほ}ふかき感^{かん}覚^{かく}のゆめ、
 わかき日のその靄^ねに音^{ひび}は響^{ひび}く、静^{しづ}ころなし。

おそはる
 晩^{むろ}春^{うち}の室^{むろ}の内^{うち}、

暮^ふれなやみ、暮^ふれなやみ、噴^{ふき}水^{あげ}の水はしたたる……
 そのもとにあまりりす赤くほのめき、
 甘く、またちらぼひぬ、へりオトロオブ。
 わかき日は暮^くるれども夢はなほ静^{しづ}ころなし。

陰影の瞳

ゆふべ
 夕となればかの思曇硝子をぬけいでて、
 廃れし園そののなほ甘きときめきの香かに顫ふるへつつ、
 はや饅すえ菱なゆる芙蓉花ふようくわの腐くされの紅あかきものかげと、
 纏もつれてやまぬ秦皮とねりこの陰影いんえいにこそひそみしか。

いかよ
 如何に呼よべども静しづまらぬ瞳ひとみに絶たえず涙して、
 帰かへるともせず、密ひそやかに、はた、果はてしなく見み入りぬる。
 そこともわかぬ森かげの鬱メランコリア 憂うすやみの薄闇うすやみに、
 ほのかにのこる噴ふきあけ水の青きひとすぢ……

四十二年十二月

四十一年十月

赤き僧正

邪じや宗しゆうの僧そうぞ彷徨さまよへる……瞳まなこ据すゑつつ、
 黄たそがれ昏あかの薬やく草さう園えんの外ぐわい光くわうに浮うきいでながら、
 赤あか々と毒どくのほめきの恐怖おそれして、顫ふるひ戦をのく
 陰いん影えいのそこはかとなきおぼろめき

まへに、うしろに……きはあれど、月の光の

水みの面もなる葦あしのわか芽めに顫ふるふ時。

あるは、靄もふる遠をち方かたの窓がらの硝す子すに

ほの青あおきソロのピアノの咽むせぶ時。

瞳まなこ据すゑつつ身み動じろかず、長ちゆうき僧そう服ふく

爛らん壊えする暗あん紅こう色しよくのほひしてただ暮くれれなやむ。

さて在あるは、囊さきに吸すひたる

Hachisch 《ハシツシユ》の毒のめぐりを待てるにか、
 あるは劇^{はげ}しき 飲^{くわんらく} 樂^{らく}の後の魔^{ます}睡^{すい}や忍^{しの}ぶらむ。
 手に持^もつは黒^{くろ}き梟^う
 爛^{らん}々^くと眼^めは光^ある……

……そのすそに蟋^{こほろぎ}蟀^{せう}の啼^なく……

WHISKY.

夕^{ゆふぐれ}暮^{くれ}のものあかき空^{そら}、
 その空^{そら}に百^も舌^{ずな}啼^なきしき^きる。
 Whisky 《ウイスキー》の罍^{びん}の列^{れつ}
 冷^{ひや}やかに拭^ふく少^{をとめ}女^め、

四十一年十二月

見よ、あかき夕暮ゆふぐれの空そら、
その空そらに百舌もずな啼なきしきる。

天鵝絨のほひ

やはらかに腐れつつゆく暗やみの室むろ。
その片隅かたすみの薄うすあかり、背そびらにうけて
天鵝絨びろうどの赤あかきふくらみうちかつぎ、
にほふともなく在るとなく、蹲うづくみ居れば。

暮れてゆく夏の思と、日向葵ひぐるまの
凋しをれの甘かき香かもぞする。……ああ見まもれど
おもむろに悩なやみまじろふ色の陰影かげ

それともわかね……熱病ねつびやうの闇のをのき……

Hachisch 《ハシツシユ》か、酔すか、茴香酒アブサンか、くるほしく

溺おぼれしあとの日の疲労つかれ……纏もつれちらぼふ

Wagner 《ワグネル》の恋慕れんぼの楽がくの音ねのゆらぎ

耳かたぶけてうち透すかし、在ありは在あれども。

それらみな素足すあしのもとのくらがりに

爛壞らんゑの光放はなつとき、そのかなしみの

腐くされたる曲きよくみどりの緑を如何いかにせむ。

君を思ふとのたまひしゆめの言葉ことばも。

わかき日の赤あかきなやみに織りいでし

にほひ、いろ、ゆめ、おぼろかに嗅かぐとなけれど、

ものやはに暮れもかぬれば、わがこころ

天鵝絨深くひきかつぎ、今日も涙す。

濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の
 生くさく吐息するかと蒸し暑く、
 はた、冷やかに官能の疲れし光——
 月はなほ夜の氛囲気の朧なる恐怖に懸る。

濃霧はそそぐ……そこここに虫の神経
 鋭く、甘く、圧しつぶさるる嗟嘆して
 飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。
 薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧のうむはそそぐ……さながらに戦をのく窓は
 アラビヤアラビヤの魔法まはふの館たちの薄うす笑わらひ。

麻痺しびれ薬ぐすりの酸すゆき香かに日ひねもす噎むせて

聾ろうしたる、はた、盲めしひたる円頂まるやね閣ねか、壁かの中ちゆう風ふう。

濃霧のうむはそそぐ……甘く、また、重く、くるしく、

いづくにか凋しをれし花はなの息いきづまり、

苑そののあたりの泥濘ぬかるみに落ちし燕つばきや、

月つきの色いろ半死はんしの生なまに悩なやむごとただかき曇くもる。

濃霧のうむはそそぐ……いつしかに虫むしも盲しひつつ

聾ろうしたる光ひかりのそこそこにうち痺しびれ、

唾おとしとぞなる。そのときにひとつの硝子がらす

幽魂いんこんの如ごとくに青くおぼろめき、ピアノ鳴りいづ。

濃霧はそそぐ……数の、見よ、人かげうごき、

闇くる夜の恐怖か、痛きわななきに

ただかいさぐる手のさばき——壺の弾奏、
 盲目弾き、啞と聾者円ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……声もなき声の密語や。

官能の疲れにまじるすすりなき

壺の震慄の音も甘く聾しゆきつつ、

ちかき野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき瘡癩。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頹、

呼吸深く 囉仿謨吸ひ入るる

朧たる暑き夜の魔睡……重く、いみじく、

音もなき盲目の院の雰囲気にはしたたる。

赤き花の魔睡

日は真昼、ものあたたかに光素の

波動は甘く、また、緩るく、戸に照りかへす、

その濁る硝子のなかに音もなく、

囉仿護香ぞ滴る……毒の※言……

遠くきく、電車のきしり……

……棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の柔毛と、蹠の

ふくらのしろみ悩ましく過ぎゆく時よ。

まどもとせい
 窓の下、生の痛苦に只赤く戦ぎえたてぬ草の花
 とたんくだ
 亜鉛の管の
 しめ
 湿りたる笥のすそに……いまし魔睡す……

麦の香

あかご
 嬰兒泣く……麦の香の湿るあなたに、
 つゞ
 続け泣く……やはらかに、なやましげにも、
 かむせ
 香に噎び、香に噎び、あはれまた、嬰兒泣きたつ……
 あらた
 夏の雨さと降り過ぎて
 はた
 新にもかをり蒸す野の畑いくつ湿るあなたに、
 きぬと
 赤き衣一きは若く、にほやかにけぶる揺籃や、
 すりがらす
 磨硝子、あるは窓枠、濡れ濡れて夕日さしそふ。

四十一年十二月

四十二年十二月

曇日

曇^{くもり}日^びの空^{くう}気^きのなかに、
 狂^{くる}ひいづる樟^{くす}の芽^めの鬱^{メランコリア} 憂^うよ……
 そのもとに桐^{きり}は咲^さく。

Whisky 《ウイスキー》の香^かのごときしづき、かなしみ……

そこここにいぎたなき駱駝^{らくだ}の寢息^{ねいき}、
 見^みよ、鈍^{にぶ}き綿^{めん}羊^{やう}の色^{いろ}のよごれに
 饅^すえて病^やむ藁^{わら}のくさみ、
 その湿^{しめ}る泥^ぬ凜^{かるみ}に花^{はな}はこぼれて
 紫^{むらさき}の薄^{うす}き色^{いろ}鋭^{すど}になげく……

はた、空のわか葉の威圧。

いづこにか、またもきけかし。

餌に饑ゑしベリガンのけうとき叫

山猫のものさやぎ、なげく鶯

腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る…… Whisky 《ウイスキー》の強きかなしみ……

もの甘き風のまた生あたたかさ、

猥らなる獣らの囲内のあゆみ、

のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく

眼を据ゑて毛虫啄む 嗟歎のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる…… 桐のむらさき……

かくしてや日は暮れむ、ああひと日。
 病院を逃れ来し患者の恐怖、
 赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴
 酔ひ痴れし遊蕩児の縦覧のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしぶき、かなしみ……

はたや、また、園の外ゆく

軍楽の黒き不安の壊れ落ち、夜に入る時よ、

やるせなく騒ぎいでぬる鳥獣。

また、その中に、

狂ひいづる北極熊の氷なす戦慄の声。

その闇に花はちる…… Whisky 《ウイスキー》の香の頻吹……桐の紫……

秋の瞳

晩秋おそあきの濡ぬれにたる鉄柵てすりのうへに、
 黄きなる葉の河やなぎほつれてなげく
 やはらかに葬送はうむりのうれひかなでて、
 過ぎゆきし Trombone 《トロンボーン》 いづちいにつむ。

はやも見よ、暮れはてし吊橋つりばしのすそ、
 瓦斯がすも点る……いぎたなき馬の吐息といきや、
 騒さわぎやみし曲馬師チヤリネシの楽屋がくやなる幕の青みを
 ほのかにも掲かげつつ、水みの面も見る女をんなの瞳ひとみ。

四十二年十二月

四十二年十二月

空に真赤な

空そらに真まっか赤かな雲くものいろ。
玻はり璃りに真まっか赤かな酒さけのいろ。
なんでこの身みが悲かなしかろ。
空そらに真まっか赤かな雲くものいろ。

秋のをはり

腐くされたる林りん檣じょうのいろに
なほ青あをきにほひちらぼひ、
水すゐ葉やの汚しみし卓つくに

四十一年五月

瓦斯焜炉がすこんろほのかに燃ゆるも。

病人やまうどは肌はだををさめて

愁うれはしくさしくむごとし。

何ぞ湿しめる、医局いぎよくのゆふべ、

見よ、ほめく劇薬げきやくもあり。

色冴いろさえぬ室むろにはあれど、

声こゑたててほのかに燃ゆるも

瓦斯焜炉がすこんろ……空そらと、こころと、

硝子戸がらすどに鈍にばむさびしき。

しかはあれど、寒さむきほのほに

黄きの入日いりひさしそふみぎり、

朽くちはてし秋あきの杵オロン

ほそぼそとうめきたてぬる。

十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕

『十月』は熱を病みしか、疲れしか、

濁れる河岸の磨硝子脊に凭りかかり、

霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺む。

そことなき權のうれひの音の刻み……

涙のしづく……頬にもまたゆるきなげきや……

ややありて麴包の破片を手にも取り、

四十一年十二月

さは冷やかに嘯みしめて、来るべき日の
味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に噓び、
腐れちらぼふ骸炭に足も汚されて、
小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に
一きは赤く輝やきしかの窓枠を忍ぶとき……

月光ははやもさめざめ……涙さめざめ……
十月の暮れし片頬を
ほのかにもうつしいだしぬ。

接吻の時

四十一年十二月

薄暮くれがたか、

日のあさあけか、

昼か、はた、

ゆめの夜半よはにか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命いのちの眩暈めくるめき、
赤き震慄おびえの接吻くちづけにひたと身顫みふるふ一刹那いつせつな。

あな、見よ、青き大月たいげつは西よりのぼり、

あなや、また瘡病きやうやむ終はての顫ふるして

東へ落つる日の光、

大おほぞらに星はなげかひ、

青く盲めしひし水面みのもにほ藥香くすりかにほふ。

あはれ、また、わが立つ野辺のべの草は皆色も干乾ひからび、

折り伏せる人の骸かばねの夜よのうめき、
 ひとだまいろ
 人霊色の

木の列きれつは、あなや、わが挽歌ひきうたうたふ。

かくて、はや落穂おちほひろひの農人のうにんが寒き瞳よ。

よろこび
 歓楽の穂のひとつだに残のこさじと、

はた、刈り入るる鎌の刃はの痛いたき光よ。

野のすゑに獣けものらわらひ、

血すに饅すえて汽車鳴き過すぐる。

あなあはれ、あなあはれ、

ふたり
 二人がほかの霊たましひのありとあらゆるその呪咀のろひ。

あさあけ
 朝明あさあけか、

死しの薄暮くれがたか、

昼か、なほ生れもせぬ日か、
 はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤き唇^{くちびる}。

濁江の空

腐^{くさ}れたる林檎^{りんご}の如き日のにほひ
 円^{まる}らに、さあれ、光なく甘^{あま}げに沈む
 晩^{おそ}春^{はる}の濁^{にご}重^{おも}たき霽^{うち}の内、
 ふと、カキ色^{いろ}の軽^{けい}気球^{ききゅう}くだるけはひす。

遠^{をち}方^{かた}の曇^{くも}れる都^{とし}市^しの屋^や根^ねの色

四十一年六月

たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、
 濁江のねぶたき、あるは、やや赤き
 にほひの空のいづこにか洩るる鉄の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より

あかるともなき 灰 紅の帆のふくらみに

伝へくる潜水夫が作業にか、

鯁えたる吐息そこはかと水面に黄ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、

はや倦ましげに 人形をそが手に泣かす。

日暮どき、入日に濁る靄の内、

また、ふくらかに軽気球くだるけはひす。

魔国のたそがれ

うち曇る 暗紅色の 大きな日の
 魔法の国に病ましげの笑して入れば、
 もの甘き 驢馬の鳴く音にもよほされ、
 このもかのもに悩ましき吐息ぞおこる。

そのかみの 激しき夢や忍ぶらむ。
 鬱黄の百合は血ににじむ眸をつぶり、
 人間の声して挑み、飛びかはし
 鸚鵡の鳥はかなしげに翅ふるはず。

草も木もかの誘惑に化されつる
 旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく

えもわかぬ毒の怨言になやまされ、
われと悲しき 歓 樂に怕れて顫ふ。

日は沈み、たそがれどきの空の色
青き魔薬の薫して古りつつゆけば、
ほのかにも誘はれ来る 隊 商の
鈴鳴る……あはれ、今日もまた恐怖の予報。

はとばかり黙み戦くものの息。
色天鵝絨を擦るごとき裳裾のほかは
声もなく甘く重たき靄の闇、
はやも 王女の領らすべき夜とこそなりぬ。

四十一年八月

蜜の室

薄^{くれがた}暮^{うる}の潤^{うる}みにごれる室^{むろ}の内^{うち}、
甘^{くさ}くも腐^{ゆり}る百^{みつ}合^{みつ}の蜜^{みつ}、はた、靄^{もや}ほかし
色^{いろ}赤^{あか}きいんくの罌^{びん}のかたちして
ひそかに点^{とも}る豆^{まめ}らんぶ息^{いき}づみ曇^曇る。

『豊^{とよくに}国^{くに}』のぼやけし似^に顔^{がほなま}生^{なま}ぬるく、
曇^{くもり}硝^{がらす}子の窓^{まど}のそと外^{ぐわいくわう}光^{ひかり}なやむ。
もの本^{ほん}、あるはちらぼふ日のなげき、
暮^{たまし}れもなやめる靈^{たましひ}の金^{きん}字^じのほひ。

接^{くちつけ}吻^なの長^{なが}き甘^{あま}さに倦^あきぬらむ。

そと手^てをほどき靄^{もや}の内^{うち}さぐる心地^{こころち}に、
色^{いろ}盲^{まう}の瞳^{ひとみ}の女^{をんな}うらまどひ、

病めるペリガンいま遠き湿地になげく。

かかるとき、おほめき摩る Violon 《オオロン》の
 なやみの絃の手触のほひの重さ。
 鈍き毛の絨氈に甘き蜜の闇
 澱み饅えつつ……血のごともらんぷは消ゆる。

酒と煙草に

酒と煙草にうつとりと、
 倦めるころを見まもれば、
 それとしもなき霊のいろ
 曇りながらに泣きいづる。

四十一年八月

なにか嘆かむ、うきうきと、
三味に燥やぐわがこころ。
なにか嘆かむ、さいへ、また
霊はしくしく泣きいづる。

鈴の音

日は赤し、窓の上に恐怖の鳥
ひた黙み暮れかかる砂漠を熟視む。

けふ
今日もまたもの鈍き駱駝をつらね、
ひとむれ
一群のわがやから消えさりゆきぬ。

四十一年五月

もの甘き鈴の音、ああそを聴けよ。

からら、からら、ら、ら、ら……

暮れのこるピラミドの暗紅色よ。

そが空のうち濁る重き空気よ。

いづこにか月の色ほのめくごとし。

からら、からら、ら、ら、ら……

かの群よ、靄ふかく、いまかひろぐる

色鈍き、幽鬱の毛織の天幕。

駱駝らのためいきもそこはかとなく。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかぬ。

鱧え温るむ空のをち、薄らあかりに、

ほのかにも此方こなた見るスフィンクスの瞳。

からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静しづかなるスフィンクスの瞳。

ああ暗示あんじ……えもわかぬ夢の象徴シムボル。

またくいま埃えじぶと及よの夜とやなるらむ。

からら、からら、ら、ら、ら……

烏まどいまはたと遠く飛び去り、

窓まどにただ色あかき燈とも火点びともる。

夢の奥

四十一年八月

ほのかにもやはらかきにほひの園生そのふ。

あはれ、そのゆめの奥おく。日ひと夜よのあはひ。

薄うすあかる空の色ひそかに顫ふるひ

暮れもゆくそのしばし、声なく立てる

真白ましろなる大理石なめいしの男をとこの像がた、

微妙いみじくもまた貴あてに瞑目めつぶりながら

清きよらなる面おもの色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙たへに女をみなの眼めざし

あはれそが夢ゆめふかき空そら色いろしつつ、

にほやかになやましの思おもはうるむ。

そがなかに埋うもれたる素馨そけいのなげき、

蒸むし甘あまき沈ちん丁てうのあるは刺させども

なにほどの香かの痛いたみ身みにしおぼえむ。

わかうどは声こゑもなし、清きよく、かなしく。

薄暮たそがれにせきもあへぬ女をんなの吐息といき

あはれその愁うれな如し、しづく噴水ふきあげ

そことなう節ふしゆるうゆるなべに、

いつしかとほのめきぬ月の光も。

その空に、その苑そのに、ほの青みに

静かなる 歔すすりなき 歔 泣きもいでつつ、

いづくにか、さまだるる愛慕あいぼのなげき。

やはらかきほの熱ほてる女の足音あのと

あはれそのほめき如なし、燃もえも生あれゆく

ゆめにほふ心しんのん音のうつつなきかな。

大理石なめいしの身の白しろみ、面おももほのかに、

ひらきゆくその眼めざし、なかば閉ぢつつ、

ゆめのごと空あふ仰あふぎ、いまぞ見惚みほるる。

色わかき夜の星、うるむ紅。<sup>よる
くれなる</sup>

四十一年七月

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日^{きのふ}まで過ぎ^すし河岸^{かはぎし}。
今日^{けふ}は見よ、

色赤き花に日の照り、かなしくも依依^{ええてる}兎^うふ。
あはれまた病^やめる Piano 《ピアノ》 も……

四十一年九月

昨日と今日と

わかうどのせはしきよ。

きは昨日きのふ世をも厭ひて重格魯密母ぢゆうくろラムと求めも泣きしか、
今朝けさははや林檎吸ひつつ霧深き河岸路かしぢを辿る。

歌樂し、鳴らす木履きくつに……

四十一年十一月

わかき日

『かくまでも、かくまでも、

わかうどは悲しかるにや。』

『さなり、女をみな、

わかき日には、

ましてまた才さいある身には。』

四十一年十一月

朱の伴奏

凡て情緒也。静かなる精舎の庭にほのめきいでて紅の戦慄に盲ひたる井オロンの響はわが内心の旋律にして、赤き絶叫のなかにほのかに啼けるこほろぎの音はこれ亦わが情緒の一絃によりて密かに奏でらるる愁也。なげかひ也。その他おほむね之に倣ふ。

謀坂

ひと日、わが精舎の庭に、

晩秋の静かなる落日のなかに、

あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、

いとほのに幷オロンの、その絃の、

その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火と懺悔のくゆり

ほのぼのと、廊いづる白き衣は

夕暮に言もなき修道女の長き一列。

さあれ、いま、幷オロンの、くるしみの、

刺すがごと火の酒の、その絃のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、
 夢燃ゆる、噴水の吐息のなかに、
 さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、
 いと強き硝薬の、黒き火の、
 地の底の導火燵き、
 牛才ロンぞ狂ひ泣く。

跳り来る車輻の響、
 毒の弾丸、血の烟、閃めく刃、
 あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、
 紅の、戦慄の、その極の
 瞬間の叫喚燵き、
 牛才ロンぞ盲ひたる。

精舎も、空も。

一ほろぎ

四十年十二月

微ほのにいまこほろぎ啼なける。

日ひか落おつる——眼めをみひらけば

朱しゆの畏おそれ怖おそくわと照てりひびく。

内ない心しんの苦にがきおびえか、

めくるめく痛いたき日ひの色いろ

眼めつぶれど、はた、照てりひびく。

そのなかにこほろぎ啼ける。

とどろめく銃つゝ音おとしばし、

瘡きずつける悪あくのうごめき

そこここに、あるは疲つかれて

轆しきなやむ砲はう車しやのあへぎ、

逃げまどふ赤あかきもろごゑ。

そのなかにこほろぎ啼ける。

盲^{めし}ひ、ゆく恋のまぼろし——

その底に疼^{うず}きくるしむ

ししむ争^とると、
肉の鋭^さき絶叫、

はた、暗^{くら}き曲^きの死^しの楽^{がく}

たましひ
霊^{たま}ぞ弾^{たま}きも連^つれぬる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

あなや、また呻^{うめ}吟^きは洩^もるる。

なまり
鉛^なめく首^なのあたりゆ

幽^い界^うの呪^の咀^ろか洩^ひるる。

寝^ねがへれば血^ちに染^くみ顫^{ふる}ふ

わが敵面かたぢもぞ死にたる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

はた、裂さくる赤き火の弾丸たま

たと笑ふ、と見る、我われ燬やき

我われならぬ獣けもののつらね

真ま黒くろなる楽がくして奔はしる。

執しつ念ねんの闇やみ曳ひき奔はしる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

日や暮るる。我はや死ぬる。

野をあげて末期まつごのあらび——

暗くらき血の海うみに溺おぼるる

赤き悲苦、赤きくるめき、

ああ、今し、くわとこそ狂へ。

微ほになほこほろぎ啼なける。

四十年十二月

序楽

ひと日、わが想おもひの室むろの日もゆふべ、

光、もののね、色、にほひ——声なき沈黙しじま

徐おもむろにとりあつめたる室むろの内うち、いとおもむろに、

薄くれがた暮くれがたのタンホイゼルの譜ふのしるし

ながめて人はゆめのごとほのかにならぶ。

壁はみな鈍にぶき愁うれひなりいでし
象ざうの香かの色まろらかに想おも鎖ひしぬれ、
その隅に瞳の色の窓ひとつ、玻璃はりの遠見とほみに
冷ひえはてしこの世のほかの夢の空
かはたれどきの薄うす明あかりほのかにうつる。

あはれ、見よ、そのかみの苦惱なやみむなしく
壁はいたみ、円まろ柱はしら熔とろけくづれて
朽くちはてし熔岩ラヴァに埋うもるポンペイを、わが幻まぼろしを。
ひとつとはいましゆるかに絃いしの弓、
はた、もろもろの調てう楽がくの器うつはをぞ執とる。

暗むろみゆく室ぬち内うちよ、暗むろみゆきつつ
想おもの沈黙しじま重おもたげに音おとなく沈しみ、
そことなき月かげのほの淡あはくさし入るなべに、

はじめまづオオロンのひとすすりなき、
鈍色にびいろ 長き衣ころもみな瞳をつぶる。

燃えそむるヴェスピアス、空のあなたに

色あたらくれなみ新しき紅の火ぞ噴ふきのぼる。

廃すたれたる夢の古墟ふるつか、さとあかる我室わがむろの内、

ひとときに渦巻うづまきかへす序しよのしらべ

オオケストラ
管絃樂部のうめきより夜よには入りぬる。

納曾利

入日のしばし、空はいま雲おびえの震慄のあかあかと
鋭すどにわかく、はた、苦にがく狂くるひただる楽がくの色。

四十一年二月

また、高窓の鬱金香。かげに斃るる白牛の
 眉間のいたみ、憤怒。血に笑む人がさけびごゑ。

さあれ、いま納會利のなげき……

鈍き思の灰色の壁の家に、

吹き鳴らす古き舞樂の笙の節、

納會利のなげき……

納會利のなげき、ひとしなみ

おほらにほふ雅楽寮の古きいみじき日の愁、

納會利の舞の

人のゆめ、鈍くものうき足どりの裾ゆるらかに、

おもむろの振のみやびの舞あそび、

納會利のなげき……

くりかへし、さばかりかへし、

ゆめのごと後に連るる笙の節、

笛のねとりもすずろかに、広き家内に、

おなじことおなじ嬬にくりかへし、

舞へる思の

倦める思のほやかさ、

ゆるき鞆鼓の

音もにぶく、

古き納曾利の舞をさめ……

今しも街の空高く消ゆる光のわななきに、

ほのかに青く、なほ苦く顫ひくづる雲の色。

また、浮きのこる鬱金香。暮れて果てたる白牛の

声なき骸。人だかり、血を見て黙す冷笑。

ほのかにひとつ

罌粟けしひらく、ほのかにひとつ、
また、ひとつ……

やはらかき麦生むぎぶのなかに、
軟風なよかぜのゆらゆるそのに。

薄き日うすの暮るとしもなく、
月つきしろの顫ふるふゆめぢを、

纏もつれ入るピアノの吐息といき
ゆふぐれになぞも泣かるる。

さあれ、またほのに生れゆく
色あかきなやみのほめき。

やはらかき麦生の靄に、
軟風のゆらゆる胸に、

罌粟ひらく、ほのかにひとつ、
また、ひとつ……

耽溺

あな悲し、紅き帆きたる。
聴けよ、今、紅き帆きたる。

白日はくじつの光の水脈みに、
わが恋きかくの器樂きかくの海に。

あはれ、聴きけ、光ひかりは噓むせび、

海顫うねりひ、清搔すがきこ焦こがれ

眩暈めぐるめく悲かなしみ愁はての極はて、

苦悶もたえそふ歓樂よろこびのせて

キユラソオの紅あかき帆ほひびく。

弾ひけよ、弾ひけ、毒どくのオオロン

吹ふけよ、また媚葉びやくの嵐あらし。

あはれ歌うた、あはれ幻まぼろし、

その海うみに紅あかき帆ほ光ひかりる。

海の歌うたきこゆ、このとき、

『噫、かなし、炎よ、慾よ、
接吻よ。』

聴けよ、また苦き愛着、
肉のおびえと恐怖、

『死ねよ、死ね』、紅き帆響く、
『恋よ、汝よ。』

弾けよ、弾け、毒のオオロン
吹けよ、また媚薬の嵐。

一瞬よ、——光よ、水脈よ、
楽の音よ——酒のキウラソオ、
接吻の非命の快樂、
毒水の火のわななきよ。

狂へ、狂へ、破滅の渚、
 聴くははや楽の大極、
 狂乱の日の光吸ふ
 紅き帆の終のはためき。

死なむ、死なむ、二人は死なむ。

紅き帆きゆる。
 紅き帆きゆる。

といき

大空に落日ただよひ、

四十年十二月

黒船

旅しつづ燃えゆく黄雲きんぐも。

そのしたの伽藍がらんの豊いらか

なかぼき

半黄なかぼきになかばほのかに、

うすやみ

薄闇うすやみに蠟ろうの火ちにほひ、

まるはしら

円柱まるはしら 　またく暮れたる。

ほのめくは鳩しらはの白羽しろはか、

しきいし

敷石しきいしの闇やみにはひとり

めしひ

盲めしひの子こひたと膝ひざつけ、

ほのかにも尺しゃく八はち吹ふける、

あはれ、その追おひ分のわけふし。

四十年十二月

黒煙くろけぶり ほのにひとすぢ。——

あはれ、日は血を吐く悶もだえあかあかと

濡れつつ淀よどむ悪の雲そのとどろきに

燃え狂ふ恋慕れんぼの楽がくの断末魔。

遠目とほめに濁る蒼海わだつみの色こそあかれ、

黒潮くろしほの水脈みのはたての水けぶり、

はた、とどろ撃うつ毒の砲弾たま、清すずしき喇叭らっぱ、

薄暮くれがたの朱あけのおびえの戦たに

疲れくるめく衰おとろへぞああ音を搾しぼる。

黒煙くろけぶり またもふたすぢ。——

序じよのしらべ絶たえつ続つきつ、いつしかに

黒き悩くろなやみの旋律せんりつぞ渦うづま巻き起る。

逃にげ来くるは密獵船みつれうせんの旗はたじるし、

痕^{きず}き^つ噎^むせ
 血^けと汚^が穢^れ、はた憤^{いきどほ}怒^り
 おしなべて黄^あばみ騒^{さわ}立^たつ楽^がの色^{いろ}。
 空^にには苦^にき嘲^{あざ}けり笑^わに雲^うかき乱^みれ、
 重^{おも}りゆく煩^{もた}悶^えのあらびはやもまた
 黒^おき恐^そ怖^れのはたたためき海^うより煙^{えん}る。

黒煙三すぢ、五すぢ。――

幻^{げん}法^{ぽう}のこれや苦^{くる}しき脅^{おび}かし
 迫^{せま}

いと淫^{みだ}らかに蒸^いし挑^いむ疾^{はや}風^ちのもとに、

現^まれて真^ま黒^{くろ}に歎^{なげ}く楽^がの船^{ふね}、

生^なあをじろき鱧^{ふか}の腹^{はら}ただほのぼのと、

暮^くれがての赤^{あか}きくるしみ、うめきごゑ、

血^ちの甲^か板^{ばん}のうへにまた爛^たれて叫^なぶ

楽^が慾^{よく}の破^は片^{ぺん}の砲^た弾^まぞ慄^{わな}ける。

ああその空^{そら}にはたたためく黒^{くろ}き帆^ふのかげ。

黒煙終に七すぢ。――

吹きかはす銀ぎんの喇叭らふもたえだえに、

渦たけ巻かくき猛はてる楽わだつみの極はて、蒼わだつみ海みけぶり、

悪あくの雲くもとどろとどろの乱らん擾ぜうに

急あわた忙ましくも呪のろはしき夜よのたたずまひ。

濡ぬれ焙いぶる水みづ無な月げつぞらの日ひの名な残ごり

はた掻かき濁にごし、暗あん澹たんと、あはれ黒くろ船ふね、

真ま黒くろなる管オオケストラ絃せん楽らの帆ひの響びび

死しと悔くわい恨こんの闇みだ擾だし壊くわれくづるる。

地平

四十一年二月

あな哀れ、今日もまた銅の雲をぞ生める。
 あな哀れ、明日も亦鈍き血の毒をや吐かむ。

見るからにただ熱し、心は重し。
 察るだにいや苦し、愁はおもし。

かの青き国のあこがれ、
 つねに見る地平のはてに、
 大空の真昼の色と、
 連れて弾く緑ひとつら。

その緑琴柱にはして、
 弾きなづむ鳩の羽の夢、
 幌の星、剣のなげき、
 清搔はほのかに薫ゆる。

さては、日の白き恐怖に
静かなる太鼓のとりぎ、
昼領らす神か拊たせる、
ころころとまたゆるやかに。

また絶えず、吐息のつらね
かなたより笛してうかび、
こなたより絃して消ゆる、——
ほのかなる夢のおきふし。

しかはあれ、ものなべて圧す
南国の熱病雲ぞ
猥らなる毒の謔言
とどろかに歌かき濁す。

おもふ、いま水に華さき、
 野のに赤き駒こまは斃たふれむ。
 うらうへに病やましき現象きざし
 今日けふもまたどよみわづらふ。

あな哀あはれ、昨きのの日も銅あかがねのなやみかかりき。
 あな哀あはれ、明日あすもまた鈍にぶき血にこりの濁にごりかからむ。

聴あつくからにただ熱あつし、心は重し。
 思あつふだにいやくるし、愁は重し。

ふえのね

四十年十二月

ほのかに見ゆる青き頬、
あな、あな、玻璃のおびゆる。

かなたにひびく笛のね、……
青き頬ほのに消えゆく。

室にもつるふえのね、……
ふたつのにほひ盲ひゆく。

きこえずなりぬふえのね、……
内と外とのなげかひ。

またしも見ゆる青き頬。
あな、また玻璃のおびゆる。

下枝のゆらぎ

日はさしぬ、白楊はくやうの梢こずえに赤く、
 さはあれど、暮れ惑まどふ下枝しづえのゆらぎ……

水みづの面ものやはらかきにほひの嘆なげき

波なみもなき病やましさに、漣とろみうつれる

晩春おそはるの窓閉とぎす片側かたかはまち街よ、

暮くれれなやむ靄うちづみの内うち 鼓つづみをうてる。

いづこにか、もの甘あまき蜂はちの巢すのこゑ。

幼子をさなごのむれはまた吹笛フルウト鳴らし、

白楊はくやうの岸きしにそひ曇きり黄きばめる

教会けうくわいの硝子窓がらすまどながめてくださる。

日はのこる両側もうがはの梢こすゑにあかく、

さはあれど、暮れ惑まどふ下枝しづえのゆらぎ……

またあれば、公園こうえんの長椅子ベンチにもたれ、

かなたには恋慕れんぼびと苦惱なやみに抱く。

そのかげをのどやかに嬰兒あかご匍はひいで

鷺がとりの鳥とを捕らむとて岸きしゆ落ちぬる。

水面みのもなるひと騷擾さやぎ、さあれ、このとき、

慕然ましぐらに急ぎくる一列ひとつらの郵便馬車いゆうびんばしやよ、

薄闇うすやみにほひゆく赤き曇くもりの

快こころよさ、人はただ街まちをばながむ。

あかじも
灯点る、さあれなほ梢こすゑはにほひ、
また
全くいま暮れはてし下枝しづえのゆらぎ……

雨の日ぐらし

ち、ち、ち、ち、と、もののせはしく
きざおと
刻む音……

かし
河岸のそば、
かびか
黴の香のしめりも暗し、

かくてあな暮れてもゆくか、
えきてい
駅逓の局の長壁

四十一年八月

灰色はひいろに、暗きうれひに、
おとつひも、昨日きのふも、今日けふも。

さあれ、なほ薰くゆりのこれる
ひとつらひとつらの紅あかき花はな罌けし粟
かたかげの草に濡れつつ、
うちしめり浮きもいでぬる。

雨はまたくらく、あかるく、
やはらかきゆめの曲めろでい節……

ち、ち、ち、ち、と絶えずせはしく
刻きざむ音……

角窓かくまどの玻璃はりのくらみを
死しの報知しらせひまなく打電うちでんてる。

いづこにか鈴すずの音ねしつつ、

近く、

はた、速きのく軋しり、

待ちあぐむ郵便いゆうびん馬車ばしやの

旗いろうの色見えも来なくに、

うち曇る馬の遠とほ嘶なき。

さあれ、ふと

夕日さしそふ。

瞬間たまゆらの夕日さしそふ。

あなあはれ、

あなあはれ、

泣き入りぬ罌粟けしのひとりつら、

最終いやはてに燃もえてもちりぬ。

灰色はひいろの局きよくは夜よに入る。

狂人の音楽

空気くうきは甘し……また赤し……黄きに……はた、緑みどり……

晩夏おそなつの午後五時半につくわうの日光かげりは、を見せて、
蒸し暑ふきぬく噴水ふきぬに濡ぬれて照ありかへす。
瘋癲院ふうてんいんの陰鬱いんうつに硝子がらすは光り、
草場くさばには青あおき飛沫しぶきの茴香酒アブサントひ冷ひやえたちわたる。

いま狂人きやうじんのひと群むれは空うち仰あやふぎ——

四十一年五月

饗宴きやうえんの樂器がくきとりどりかき抱いだき、自棄やけに、しみらに、
 傷きずつける獸けもののごとき雲おもの面おも
 ひたに怖おそれて色しき盲まぼろしの幻覺まぼろしを見る。
 空氣くうきは重おもし……また赤あかし……共に……はた緑みどり……

* * * * *

オボー鳴なる……また、トロムボオン……
 狂くるほしき牛オラの唸うなり……

一人ひとりの酸すゆき音ねは飛かびて怜羊かもしかとなり、
 ひとつは赤あかき顔かほゑがき、笑わらひわななく
 音ねの恐怖おそれ……はた、ほのしろき髑髏どくろ舞まひ……

弾ひけ弾ひけ……鳴ならせ……また舞踏をどれ……

セロの、喇叭らつぱの蛇へびの香かよ、

はた、爛たゞれ泣く才さいオロンの空には赤子飛びみだれ、

妄想まうさうきやう狂きやうのめぐりにはバツソの盲目めしひ

小さな骸しかばねいろ色いろの呪咀のろひして逃のがれふためく。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏をどれ……

クラリネットの槍やりさき尖さきよ、

メロヂア
曲節メロヂアのひらめき緩ゆるく、また急はやく、

アルト歌者うたひのなげかひを暈くらましなから、

ひとつらね
一列ひとつらね、血ちしほしたたる神経しんけいの

壁れんぐわの煉瓦れんぐわのもとを行ゆく……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏をどれ……、

かなしみの蛇、緑の眼
 槍に貫かれてまた歎く……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

はた、フルウト
 吹笛の香のしづき、

青じろき花どくだみの鋭さに、
 濁りて光る山椒魚、沼の調に音は漣む。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

傷きめぐる観覧車、

はたや、太鼓の悶絶に列なり走る槍尖よ、
 窓の硝子に火は叫び、

月琴の雨ふりそそぐ……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

赤き神経……盲ひし血……

聾せる脳の鑢の音……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

* * * *

空気は酸し……いま青し……黄に……なほ赤く……

はやも見よ、日の入りがたの雲の色

狂気の楽の音につれて波だちわたり、

悪獣の蹠のごと血を滴す。

そがもとに噴水ふきみづのむせび
濡れ濡れて薄闇うすやみに入る……

空気くわうきは重し……なほ赤し……黄きに……また緑みどり……

いつしかに蒸気じやうきの鈍にぶき船腹ふなばらの

ごとくに光りかぎろひし瘋癲院ふうてんゐんも暮れゆけば、
ただ冷えしひぶく茴香酒アブサント、鋭すき玻璃はりのすすりなき。

草場くさばの赤あかき一群ひとむれよ、眼めををののかし、

躍をどり泣き弾ひきただらかす歡くわんらく樂らくの

はてしもあらぬ色しき盲まうのまぼろしのゆめ……

午後の七時の印いん象しやうはかくて夜よに入る。

空気くわうきは苦にがし……はや暗くらし……黄きに……なほ青あおく……

風のあと

夕日^{ゆふひ}はなやかに、

こほろぎ啼^なく。

あはれ、ひと日、木の葉ちらし吹き荒^{すさ}みたる風も落ちて、

夕日^{ゆふひ}はなやかに、

こほろぎ啼^なく。

月の出

四十一年九月

四十一年八月

ほのかにほのかに音色ねいろぞ揺る。

かすかにひそかにほひぞ鳴る。

しみに列立なみたつわかき白楊ほびゆら

その葉のくらみにこころ顛ふるふ。

ほのかにほのかに吐息といきぞ揺る。

かすかにひそかに雫しづくぞ鳴る。

あふげほほのめくゆめの白楊ほびゆら、

愁うれひの水の面を權かゝはすべる。

吐息といきのをののき、君が眼めざし

やはらに縫もつれてたゆたふとき、

光のひとすぢ——顛ふるふ白楊ほびゆら

文月の香炉かうろに濡れてけぶる。

さてしもゆるけくにほふ夢路、
 したたりしたたる權のしづく、
 薄らに沁みゆく月のでしほ
 ほのかにわれらが小舟ぞゆく。

ほのめく接吻、からむ頸、
 いづれか恋慕の吐息ならぬ。
 夢見てよりそふわれら、白楊、
 水上透かしてこころ顫ふ。

四十一年二月

外光と印象

近世仏国絵画の鑑賞者をわかき旅人にたとへばや。もとより Watteau の羅曼底、Corot の叙情詩は唯微かにそのおぼろげなる記憶に残れるのみ。やや暗き Fontainebleau の森より曇れる道を巴里の市街に出づれば Seine の河、そが上の船、河に臨める〔Cafe〕の、皆「刹那」の如くしるく明かなる Manet の陽光に輝きわたれるに驚くならむ。そは Velazquez の灰色より俄に現れいでたる午后の日なりき。あはれ日はやうやう暮れてぞゆく。金緑に紅薔薇を覆輪にしたりけむ Monet の波の面も青みゆき、青みゆき、ほのかになつかしくはた悲しき Cafe の夕は来る。燈の薄黄は Whistler の好みの色とぞ。月出づ。Pissarro のあをき薔を Verlaime の白月の賦など口荒みつつ過ぎゆくは誰が家の子ぞや。

太田正雄

冷めがたの印象

あわただし、旗ひるがへし、
朱しゆの色のえきていぐるまをど駅えきていぐるまをど馬車跳りゆく。

曇くもりび日の色なき街まちは

清水しみづさす石油せきゆの噫むせび、

轆しかれ泣く停車場ていしやばの鈴すず、溝みぞの毒どく、

昼しやみの三味やすすず、鑢磨やすりる歌、

茴香酒アブサンの青み泡あわだつ火さけびの叫さけび、

絶くるえず眩やまならしめく白楊やまならし、遂むれに疲れて

マンドリンかな奏かなでわづらふ風むれの群むれ、

あなあはれ、そのかげに乞食かたゐゆきかふ。

くわと来り、燃えゆく旗は
死に墮つる、夏の光のうしろかげ。

灰色の亜鉛の屋根に、
青銅の擬宝珠の錆に、
また寒き万象の愁のうへに、
爛れ弾く猩紅熱の火の調、
狂気の色と冷めがたの疲労に、今は
ひた嘆く、悔と、悩と、戦慄と。

あかあかとひらめく旗は
猥らなるその最終の夏の曲。

あなあはれ、あなあはれ、
あなあはれ、光消えさる。

赤子

赤子啼く、
急き瀬の中。

壁重き女囚の牢獄、
鉄の門、

淫慾の蛇の紋章

くわとおびえ、

水に、落日に

照りかへし、

黄ばむひととき。

あかごな
赤子啼く、
はやせうち
急ぎ瀬の中。

暮春

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

なやまし、
かし
河岸の日のゆふべ、
日の光。

ひりあ、ひすりあ。

四十一年六月

しゆツ、しゆツ……

眼科がんくわの窓まどの磨硝子すりがらす、しどろもどろの

白楊はくやうの温ぬるき吐息といきにくわとばかり、

ものあたたかに、くるほしく、やはく、まぶしく、

蒸よどし淀ゆふひむ夕日の光。

黄きのほめき。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

なやまし、またも

いづこにか、

なやまし、あはれ、

音ねも妙たへに

紅あかき嘴はしある小鳥らのゆるきさをへづり。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

はた、大河おほかはの鱧すえ濁にごる、河岸かしのまぢかを

ぎちぎちと病やましげにとろろぎめぐる

灰色はいいろ黄きばむ小蒸こじょう汽きの温ぬるく、まぶしく、

またゆるくとりぎ噴ふく湯ゆ気げ

いま懈たゆるく、

また絶えず。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

いま病院の裏庭に、煉瓦のもとに、
白楊のしどろもどろの香のかげに、
窓の硝子に、

まじまじと日向求むる病人は目も悩ましく
見ぞ夢む、暮春の空と、もののねと、
水と、にほひと。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

なやまし、ただにやはらかに、くらく、まぶしく、
また懈たゆく。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

噴水の印象

噴水ふきあげのゆるきしたたり。――

霧すゐしぶく苑そのの奥、夕日ゆふひの光、

水盤すゐばんの黄きなるさざめき、

なべて、いま

ものあまき嗟嘆なげかひの色。

噴水ふきあげの病やめるしたたり。――

いづこにか病びやうじ児啼なき、ゆめはしたたる。

そこここに接吻くちつけの音おと。

空は、はた、

暮れかかる夏のわななき。

噴水ふきあげの甘あまきしたたり。――

そがもとに疲きずつける女神ぢよじんの瞳。

はた、赤くろめきき眩暈うちの中、

冷ひやみ入ひやる

銀ぎんの節ふし、雲うみのとどろき。

噴水ふきあげの暮くるるしたたり。――

くわとぞ蒸むす日ひのおびえ、晩夏ばんかのさけび、

濡ぬれ黄わうばむ憂鬱ヒステリイ症しんのゆめ

青あおむ、あな

しとしとと夢ゆめはしたたる。

四十一年七月

顔の印象 六篇

A 精舎

うち沈む 広額、夜のごとも凹める眼——

いや深く、いや重く、泣きしづむ霊の精舎。

それか、実に声もなき秦皮の森のひまより

熟視むるは暗き池、谷その水のをののき。

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩なげく

寂寥や、空の色なほ紅にほひのこれど、

静かなる、はた孤独、山間の霧にうもれて

悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。

かかる間も、底ふかく青の魚盲ひあぎとひ、

口そそぐ夢の豹水へうみづの面おもてに血音ちのねたてつつ、
 みな冷ひややき石いしの世よと化なりぞゆく、あな恐怖おそれより。

かくてなほ声こゑもなき秦とねりこ皮かわよ、秘ひそに火ひともり、
 精しやうじや舎しゃまた水晶すいせいと凝こごる時とき愁うれひやぶれて
 響ひびきいづ、響ひびきいづ、最いやはて終はての靈たまの梵ぼん鐘しょう。

B 狂へる街

緒あからめる暗くらき鼻はな、なめらかに禿はげたる額ひたひ、
 瘰ひきつ癧くちれる唇はしの端はし、光ひかりなくなやめる眼まなこ、
 なにか見る、夕ゆふばえ榮えいのひとみぎり噎むせぶ落日いりひに、
 熱ねつびやう病びやうの響ひびきする煉れんぐわや瓦わ家かか、狂まへる街まちか。

見るがまに焼酎せうちゆうの泡あわしぶきひたぶるなげ歎なげく
 そが街まちよ、立てつづく尖屋とがりやね根血ねちばみ疲つかれて
 雲赤うんせきくもだゆる日、悩なやましく馬車ばしやか駆かるやから
 霊たましひのありかをぞうち惑まどひ窓まどふりあふぐ。

その窓まどに盲めしひたる爺おぢひとり鈍にぶき刃はと研とげる。
 はた、唾おふしゆ朱しゆに笑わらひ痺しびれつつ女をみなとを説とける。
 次つぎなるは聾ろうしぬる清あまき尼みやみせん三味線さんまいせん弾ひける。

しかはあれ、照あり狂まふ街まちはまた酒たはと歌うたとに
 しどろなる舞まひの列れつあかあかと淫たはれくるめき、
 馬車ばしやのあと見みもやらず、意い味みもなく歌うたひ倒たふる。

C 醋の甕

蒼あをざめしながおも面も饅すえよどむひと瞳みのにごり、
 薄くれ暮がにみつ熟み視つめつつた撓わみちるか髪の香きけば—
 醋すのか甕めのふたならび人もなきむ室ろにしみて、
 ほのくら暗はきは璃りの窓ひややかにうれ愁ひわななく。

外面とのなるな嗟げ嘆かよ、ひ波もなきいんくの河に
 旗う青つきろ独ぶ木ね舟ねそこはかと巡めぐり漕ぎたみ、
 見なえやわかみかいぬり悩みよりい錨かり曳ひきく鎖さ巻りかれて、
 伽き羅やまじりう消え失うするく黒ろ蒸じ汽し笛きぞう呻めける。

吊つ橋りのは灰ひ白しろよ、つか疲れたる煉れん瓦ぐわのか壁べよ、
 たとまたまに整とはぬ夜よのみピアだノみ淫だれさやげど、
 ひとおびとはみ声つもなし、おも河の面をただに熟視むる。

はた、甕かめのふたならび、さこそあれ夢はたゆたひ、
 内そとと外そとかぎりなき懸へだたり隔とほりに帷墮とほりつれば、
 あな悲し、あな暗くらし、醋すの沈黙しじま長くひびかふ。

D 沈丁花

なまめけるわが女をみな、汝なは弾ひきぬ夏の日の曲きよく、
 悩なやましき眼めの色いろに、髪かみ際ぎはの紛こなおしろひに、
 緘つぐみたる色あかき唇くちびるに、あるはいやしく
 肉しむらの香かに倦うめる猥みだらなる頬ほのほほゑみに。

響ひびかふは呪のろはしき執しふと欲よく、ゆめもふくらに
 頸うなじ巻く毛のぬくみ、真白ましろなるほだしの環たまき
 そがうへに我きぞ聴きく、沈丁花ちんてうげたぎる畑はたけを、
 堪たへがたき夏の日を、狂くるはしき甘あまきひびきを。

しかはあれ、またも聴く、そが畑はたに隣となる河岸側かしきは、
 色あざぎめし浅葱幕あそぎまくしどけなく張りもつらねて、
 調しらぶるは下司げすのうた、はしやげる曲馬チヤリネの囃子はやし。

その幕らうまじの羅馬字らうまじよ、くるしげに馬いななは嘶いななき、
 おほろつぽおほろつぽひなひな、わらひ
 大喇おほら叭ひな鄙ひなびたる笑わらひしてまたも挑いどめば
 生なまあつき色なまと香かとひとさやぎ歎なげきもつるる。

E 不調子

われは見る汝なが不調ふてう、——萎しなびたる瞳つやの光沢つやに、
 おどろへおどろへほ
 衰おどろへほの頬ほにほふおしろひの厚けはひき化粧けはひに、
 あはれまた褪あせはてし髪まげの鬢まげ強よきくゆりに、
 しむらわなしむらわななき
 肉しむらわななきの戦慄しむらわななきを、いや甘よくき欲よくの疲勞つかれを。

はた思ふ、おそなつ 晩夏なまの生あつきにほひのなかに、
 倦うみしごともつと縫れ入るいと冷ひやき風の吐息といきを。
しんかい 新開の街は鏽さびびて、色赤く猥みだるる屋根を、
 濁りたる看かんばん板を、入り残る窓の落日いりひを。

なべてみな整ととのはぬ色の曲ふし……ただに鋭すき
ソプラノ 最高音の入り雑まじり、埃ほこりたつ家やなみのうへに、
 色にぶき土蔵どじやう家の江戸芝居えどしばあひとり古りたる。

あら 露はなる日の光、そがもとに三味しやみはなまめき、
へうしぎ 拍子木の歎なげきたいと痛いたし古いたき痕でに、
おとろへ かくてあな衰おとろのものいろ空そらは暮れ初む。

F 赤き恐怖

わかうどよ、汝なはくるし、尋とめあぐむ苦悶くもんの瞳ひとみ、
秀でたる眉のゆめ、ひたかわく赤くちびるき唇
みな恋の響なり、熟視みつむれば——調しらべかなでて
火のごとき馬ぐるま燃もえ過ぐる窓のかなたを。

はた、辻の真昼まひるどき、白楊はこやなぎにほひわななき、
雲浮そらかぶ空の色生なまあつく蒸あせしも汗あせばむ
街まちよ、あな音もなし、鐘はなほ鳴りもわたらね、
炎えんじやう上えんじやうの光また眼めにうつり、壁くぞ狂くるへる。

人もなき路のべよ、しとしとと血したたを滴したたらし
胆きもぬ抜ぬきて走る鬼、そがあとにただに餓うゑつつ
色赤ポき郵便函ストのみくるしげにひとり立ちたる。

かくてなほ窓の内うちすずしげに室むろは濡ぬるれど、
 戸外とのもにぞ火さかは熾さかる、………哀あはれ、哀あはれ、柵たなの上へに見よ、
 水みづもなき消火器せうくわきのうつろなる赤あかき戦いくさ慄おそ。

盲めひし沼ぬま

午後六時ごごろくじ、血けつ紅こう色しよくの日の光
 盲めひし沼ぬまにふりそそぎ、濁にごりの水みづの
 声こゑもなく傷きずき眩くらむ生なまおびえ。
 鉄てつの匂におひのひと冷ひやみ沁しみは入れども、
 影かげうつす煙草工場たばここうばの煉瓦れんぐわ壁かべ。
 眼めも痛いたましき香かのけぶり、機き械かいとどろく。

鳴なききたる鵜がてう島しまのうから

しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯気、
壁に凭りたる素裸の若者ひとり
腕拭き鉄の匂にうち噎ぶ。

はた、あかあかと蒸気罐音なく叫び、
そこここに咲きこぼれたる芹の花、

あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそそぐ。

声もなき鷺鳥のうから

色みだし水に消え入る

午後六時、鷺鳥の見たる水底は
血潮したたる沼の面の負傷の光

かき濁る泥の臭みに疲れつつ、
 水死の人の骨のごとちらほふなかに
 もの鈍き鉛の魚のめくるめき、
 はた浮びくる妄念の赤きわななき。

逃げいづる鷺鳥のうから

鳴きさやぎ汀を走る。

午後六時、あな水底より浮びくる

赤きわななき——妄念の猛ると見れば、

強き煙草に、鉄の香に、わかき男に、

顔いだす硝子の窓の少女らに血潮したたり、

歡樂の極の恐怖の日のおびえ、

顫ひ高まる苦痛ぞ朱にくづるる。

刹那、ふと太く湯気吐き
 吼えいづる休息の笛。

青き光

哀れ、みな悩み入る、夏の夜のいと青き光のなかに、
 ほの白き鉄の橋、洞円き穹窿の煉瓦、
 かげに来て米炊ぐ泥舟の鉢の撫子、
 そを見ると見下せる人々が倦みし面も。

はた絶えず、悩ましの角光り電車すぎゆく
 河岸なみの白き壁あはあはと瓦斯も点れど、
 うち向ふ暗き葉柳震慄きつ、さは震慄きつ、

四十一年七月

後うしろよりはた泣くは青白いへき屋の幽いうれい霊。

いと青きソプラノの沈みゆく光のなかに、
 饒すえて病むわかき日の薄くれがた暮のゆめ。——
 幽霊いへの屋いへよりか洩れきたる呪のろはしの音ねの
 ジムフォニ
 交響まじ体のくるしみのややありて交まじりおびゆる。

いづこにかうち囃はやす幻げんとう燈あはせの伴奏マアチの進行曲、
 かげのごと往來ゆききする白しろの衣きぬうかびつれつつ、
 映うつりゆく絵ゑのなかのいそがしさ、さは繰りかへす。——
 そのかげに苦くるしみ痛くらの暗くらきこゑまじりもだゆる。

なべてみな悩なやみ入る、夏の夜よのいと青き光のなかに。——
 蒸あつし暑なよき軟かぜら風あまもの甘あまき汗あせに揺ゆれつつ、
 ほつほつと点ともれゆく水みづの面ものなやみの燈ともし、

鹹しほからき執しつの譜ふよ………み空には星ぞうまるる。

かくてなほ悩み顫ふるふわかき日の薄暮くれがたのゆめ。——
 見よ、苦にがき闇やみの滓街衢せりちまたには淀よじみとろげど、
 新あらたにもしぶきいづる星の華はな——泡あわのなげきに
 色青き酒のごと空そらは、はた、なべて澄みゆく。

椀のふたもと

うちけぶる椀もみのふたもと。
 薄暮くれがたの山の半腹なからのすすき原はら、
 若草色わかぐさいろの夕ゆふあかり濡れにぞ濡るる
 雨の日のものしらべの微妙いみじさに、

四十一年七月

なやみ幽^{かす}けき Chopin 《シオパン》の楽^{がく}のしたたり

やはらかに絶えず霧するにほやかさ。

ああ、さはあかれ、嗟嘆^{なげかひ}の櫂^{もみ}のふたもと。

はやにほふ櫂^{もみ}のふたもと。

いつしかに色にほひゆく靄^{うすぎ}のすそ、

しみらに燃^もゆる日の薄^{うすぎ}黄^{うつつ}、映^{うつ}らふみどり、

ひそやかに暗^{くら}き夢^ひ弾^ひく列^{つらなみ}並^{なみ}の

遠^{とほ}の山^{やま}々^{やま}おしなべてものやはらかに、

近^{ちか}ほとりほのめきそむる歌^{うた}の曲^{ふし}。

ああ、はやにほへ、嗟嘆^{なげかひ}の櫂^{もみ}のふたもと。

燃えいづる櫂^{もみ}のふたもと。

濡^{した}れ滴^{かうじ}る柑子^{かうじ}の色^{いろ}のひとつらね、

深^{かさ}き青^{あお}みの重^{かさ}りにまじらひけふる

山の端はの縫つれのなやみ、あるはまた
 かすかに覗のぞく空のゆめ、雲のあからみ、
 晩夏おそなつの入りいりひに噎むせぶ夕ゆふながめ。
 ああ、また燃もゆれ、嗟嘆なげかひの樅もみのふたもと。

色うつる樅もみのふたもと。

しめやげる葬はふりの曲ふしのかなしみの

幽かすかにもものなまめきに揺曳ゆらひくなべに、

沈しづみゆく雲の青みの階シムフォニア調、

はた、さまざまのあこがれの吐息といきの薫ゆり、

薄れつつうつらふきは日のおびえ。

ああ、はた、響なげけ、嗟嘆なげかひの樅もみのふたもと。

饅すえ暗くらむ樅のふたもと。

燃えのこる想おもひのうるみひえびえと、

はや夜の沈黙しのびねに弾きも絶え入る
 列並つらなみの山のくるしみ、ひと叢むらの
 柑子かうじの靄のおほめきも音ねにこそ呻うめけ、
 おしなべて御龕みづしの空そらぞ饑すえよどむ。
 ああ、見よ、悩なやむ、嗟嘆なげかひの樅もみのふたもと。

暮れて立つ樅もみのふたもと。

声こゑもなき悲ひぐわん願ねがの通夜つやのすすりなき

薄らの闇に深みゆく、あはれ、法悦ほふえつ、

いつしかに筆ひつちりき築たあかる谷のそら、

ほのめき顫ふるふ月つき魄しろのうれひ沁みつつ

夢青む忘我われかの原の靄の色。

ああ、さは顫ふるへ嗟嘆なげかひの樅もみのふたもと。

夕日のにほひ

晩春おそはるの夕日ゆふひの中になか、

順じゆんれい 礼れいの子はひとり頬ほをふくらませ、

濁にごりたる眼めをあげて管くだうち吹ける。

腐くされゆく檻つづれ樓ろうのにほひ、

酢すと石油せきゆ……にじむ素足すあしに

落ちちれる果実くだものの皮、赤くうすく、あるは汚きたなく……

片手かたてには嚙かぢりのこせし

林檎りんごをばかたく握にぎりぬ。

かくてなほ頬ほをふくらませ

怖おつおつと吹きいづる……珠たまの石しやぼん齧かじよ。

さはあれど、珠たまのいくつは

なやましき夕暮ゆふぐれのほひのなかに

ゆらゆらと円まろみつつ、ほつと消きえたる。

ゆめ、にほひ、その吐息といき……

彼はかれまた、

怖おっおっ々と、怖おっおっ々と、……眩まぶしげに頬ほをふくらませ

蒸むし淀よどむ空くう気にぞ吹ふきもいでたる。

あはれ、見よ、

いろいろのかがやきに濡ぬれもしめりて

円まろらにもものぼりゆく大おほきなるひとつの珠たまよ。

そをいまし見あげたる無むしん心の瞳ひとみ。

背そびら後ごには、血ちしほしたたる

拳あげ、
 霞める街の
 山門の仁王の赤き
 幻想

その裏を

ちやるめらのゆく……

浴室

水落つ、たたど……浴室の真白き湯壺
 大理石の苦悩に湯気ぞたちのぼる。
 硝子の外の濁川、日にあかあかと
 小蒸汽の船腹光るひとみぎり、太鼓ぞ鳴れる。

四十一年十二月

水落つ、たたど………はひいろ 灰色の亜鉛とたんの屋根の

繫留所けいりうじよ、わが窓近き陰鬱いんうつに

行ぎやうとく 徳ゆきの人はいま見つつ声なし、

川むかひ、わうかつしよく 黄褐色の雲のもと、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど………りやうこく 両国おほつりばしの大吊橋は

うち煤すすけ、かみななめ 上手斜に日を浴びて、

色薄き黄ばみ、はた重く、ちやるめらまじり

忙せはしげに夜よに入る子らが身の運びはこび、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど………もの甘く、あるひは赤く、

うらわかきわれの素肌すはだに沁しみきたる

鉄てつのみのもにほひと、腐くされゆく石鹼しやぼんのしづき。

水面みのもには荷足にたりの暮れて呼ぶ声す、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど………たたどあな音色柔らに、
 大理石の苦悩に湯気は濃く、温るく、
 鈍きどよみと外光のなまめく靄に
 疲れゆく赤き都会のらうたげさ、太鼓ぞ鳴れる。

入日の壁

黄に潤る港の入日、
 きりしたん 邪宗の寺の入口の
 切支丹 暗めるほとり、色古りし煉瓦の壁に射かへせば、
 静かに起る日の祈祷、
 『ハレルヤ』と、奥にはにほふ 讃頌の幽けき夢路。

四十一年八月

あかあかと精舎しやうじやの入り口。――

ややあれば大風琴おほオルガンの音の吐息といき

たゆらに嘆きなげ、白蟻はくちふの盲しひゆく涙。――

壁かべのなかには埋うづもれて

眩暈めぐるめき、素肌すはだに立てるわかうどが赤まぼろしき幻。

ただ赤しやうじやき精舎しやうじやの壁かべに、

妄念まうねんは熔とろくるばかりおびえつつ

全身ぜんしん落おつる日を浴あびて真夏まなつの海うみをうち睨にらむ。

『サンタ聖マリア、イエスの御母みはは。』

一いつせい 斎をろがみをはに礼拝らいはい終らうにやくる老若らうじやくの消え入るさけび。

はた、白しろむ入いり口の色いろに

しづしづと白衣はくえの人ひとらうちつれて

湿潤しめりも暗とぐちき戸口とぐちより浮うびいでつつ、

眩^{まぶ}しげに数珠^{じゆず}ふりかざし急^{いそ}げども、
 など知らむ、素肌^{すはだ}に汗^{あせ}し熔^{とろ}けゆく苦惱^{くなう}の思^{おもひ}。

暮^くれのこる邪宗^{じゃしゆう}の御寺^{みでら}

いつしかに薄^{うす}らに青^{あお}くひらめけば

ほのかに薰^{くゆ}る沈^{ちん}の香^{かう}、波羅^{ハライソ}葦^{あし}増^{ぞう}のゆめ。

さしもまた埋^{うも}れて顛^{ふる}ふ妄^{まう}念^{ねん}の

血^ちに染^かみし踵^{かかと}のあたり、蟋蟀^{せりぎりす}啼^なきもすずろぐ。

狂^{くる}へる椿

ああ、暮^{ぼし}春^{ゆん}。

四十一年八月

なべて悩まし。

溶けゆく雲のまろがり、

大ぞらのにほひも、ゆめも。

ああ、暮春。

大理石のまぶしきにはひ——

幾基の墓の日向に

照りかへし、

くわと入る光。

ものやはき眩暈の甘き恐怖よ。

あかあかと狂ひいでぬる藪椿、

自棄に熱病む霊か、見よ、枝もたわわに

狂ひ咲き、

狂ひいでぬる赤き花、

赤き謠言。
うはごと

そがかたへなる崖の上、
がけうへ

うち湿り、熱り、まぶしく、また、ねぶく
しめ ほて

大路に淀むもののおと。
おほち よど

人力車夫は
じんりきしやふ

ひとつらね青白の幌をならべぬ。
あをしろ ぼろ

客を待つところごころに。

ああ、暮春。

さあれ、また、うちも向へる

いと高く暗き崖には、
がけ

窓もなき牢獄の壁の
まど ひとや

長き列、はては閉せる
つら とぎ

灰黒はひぐろの重おもき裏門うらもん。

はたやいま落つる日ひびぎ、
照りあかる窪地くぼちのそらの

いづこにか、

さはひとり、

湿りしめ吹きゆく

幼をきなごころの日のうれひ、

そのちやるめらの

笛ふしの曲。

笛ふしの曲……………

かくて、はた、病やみぬる椿つばき、
赤く、赤く、狂くるへる椿つばき。

吊橋のほひ

夏の日の激はげしき光

噴ふきいづる銀ぎんの濃雲こくもに照りうかび、

雲とろは熔とろけてひたおもて大河筋おほかはすぢに射かへせば、

見よ、眩暈めくるめく水の面おも、波も真白に

声もなき潮のさしひき。

そがうへに懸かかる吊橋。

煤すすけたる黝ねずみの鉄てつの桁けた構がまへ、

半月形はんげつけいの幾いくまろ円まるみ絶えつつ続つくかげに、見よ、

薄うすらに青む水の色、あるは煉瓦れんぐわの

円まる柱はしら映うつろひ、あかみ、たゆたひぬ。

銀色ぎんいろの光のなかに、

そろひゆくオオル櫂かのなげきしらしらと、

或はある灰ひの水みづ鳥とりのそこしもなき音ねのうれひ、

河岸かの氷室ひむろの壁かも、はた、ただに真昼まひるの

白蟻はくちふの冷ひやみの沈黙しじま。

かくてただ悩なやむ吊橋つりはし、

なべてみな真白ましろき水みの面も、はた、光、

ただにたゆたふ眩暈くるめきの、恐怖おそれの、灰ほの哀愁かなしみの

銀ぎんの真昼まひるに、色重いろむかき鉄てつのにほひぞ

鬱憂うつゆうに吊おられる。

鋼鉄かうてつのにほひに噓び、

絶えずたえずまた直ひたはだか裸はだかなる男おとこの子

真白ましろに光あかりり、ひとならび、力ちからあふるる面おもてして

柵さくの上より躍をどり入る、水の飛沫しぶきや、
 白金はつきんに濡ぬれてかがやく。

真白ましろなる真夏まなつの真昼まひる。

汗あせ滴したるしとどの熱ねつに薄うす曇くもり、

暈くらみて歎なげく吊橋なげのほひ目当めあてにたぎち来る

小蒸汽船こじょうきせんの灰はひばめる鈍にぶき唸うなりや、

日は光り、煙けむりうづまく。

硝子切るひと

君は切る、

色あかき硝子がらすの板いたを。

四十一年八月

落日いりひさす暮ぼしゆん春の窓に、
いそがしく撰えらびいでつつ。

君は切る、
金剛こんがうの石のわかさに。

茴香酒アブサンのごときひとすぢ
つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、
色あかき硝子がらすの板を。

君は切る、君は切る。

悪の窓 断篇七種

一 狂念

あはれ、あはれ、

青あをしろ白しろきの日の光西よりのぼり、

薄くれがた暮の灯のほひ昼もまた点ともりかなしむ。

わが街まちよ、わが窓よ、なにしかも焼耐せうちうさげ叫び、

鶴嘴つるはしのひとつらね日に光り悶もだえひらめく。

汽車きしやぞ来る、汽車きしやぞ来る、真黒まぐろげに夢とどろかし、
窓もなき灰はひいろ色の貨物くわもつぱこへう輻豹くわもつぱこへうぞ積みたる。

あはれ、はや、焼酎せうちうは醋すとかはり、人は轆しかれて、
 盲めしひつつ血ちに叫こほぶ豹へうの声遠とほに泡立あわつ。

二 疲れ

あはれ、いま暴あらびゆく接吻くちつけよ、肉しむぎの曲まが。……

かくてはや青白あざく疲れつかたる獣けものの面おもて
 今日けふもまた我見われみ据すゑ、果敢はかなげに、いと果敢はかなげに、
 色濁にじる窓硝子まじがらす外面のろより呪のろひためらふ。

いづこにかうち狂くるふオオロンよ、わが唇くちびるよ、
 身みをも燬やくべき砒素ひその壁夕かべ日ひさしそふ。

三 薄暮の負傷

血潮したたる。

薄暮くれがたの負傷てきずなやまし、かげ暗くらき溝みぞのほひに、
はた、胸むねに、床ゆかの鉛なまりに……

さあれ、夢ゆめには列つらなめて駱駝らくだぞ過すぐる。

埃及えじぶとのカイロまちの街ふるれんの古煉瓦ふるれんが

壁かべのひまには砂漠さばくなるオアシスうかぶ。

その空そらにしたたる紅あかきわが星ほしよ。……

血潮したたる。

四 象のほひ

日をひと日。

日をひと日。

日をひと日、光なし、色も盲めしひて

ふくだめる、はた、病やめるなやましきもの

窻くわふたぎ窻くわふたぎ気け倦だるげに唸うなりもぞする。

あはれ、わが幽い鬱うの象ざう

亞あ弗ふ利り加かの鈍にぶきにほひに。

日をひと日。

日をひと日。

五 悪のそびら

おどろなす髪あさいろの亜麻色

背そびら向け、今日けふもうごかず、

さあれ、また、絶えずほつほつ

息しぼり『死』にぞ吹くめる、

血のごとき石しやぼん鱈たまの珠を。

六 薄暮の印象

うまし接吻くちつけ……… 歓語さざめごと………

さあれ、空には眼めに見えぬ血潮ちしほしたたり、

なにものか負傷ておひくるしむ叫さけびごゑ、

など痛いたむ、あな薄暮くれがたの曲きよくの色、——光の沈黙しじま。

うまし接吻くちつけ……… 歓語さざめごと………

七 うめき

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。
 街しづみ、窓しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子過ぐるとき車燬きつつ

落つる日の照りかへし、そが面噓びあかれば

室内の汚穢、はた、古壁に朽ちし鉞

一斉に屠らるる牛の夢くわとばかり呻き悶ゆる。

街の子は戯れに空虚なる乳の罐たたき、

よぼよぼの飴売は、あなしばし、ちやるめらを吹く。

くわとばかり、くわとばかり、

黄きに光むかる向むかひの煉れん瓦ぐわ
くわとばかり、あなしばし。——

蟻

おほらかに、

いとおほらかに、

おほおほなる鬱うこん金の色いろの花はなの面おも。

日は真ま昼ひる、

時は極ごく熱ねつ、

ひたおもて日射ひびしにくわつと照りかへる。

時に、われ

世の蜜もとめ

雄ゆうずる 葺ずの林の底をさまよひぬ。

光の斑ふ

燬やけつ、断ちぎれつ、

豹へうのごと燃もえつつ湿しめる径みちの隈くま。

風吹かず。

仰そらふげば空は

烈れつ々と鬱うこん金を篩ふるふ葺ずの花。

さらに、聞く、

爛ただれ、饘すえばみ、

ふつつつと苦痛くつうをかもす蜜の息。

樂欲げうよくの

極みか、甘あまき

寂じやくまく寞まくの大だい光くわう明みやう、に喘あへぐ時。

人界にんがいの

七な谷なた隔にへだて、

丁とう々とうと白びやく檀だんを伐うつ斧をのの音おと。

華はなのかげ

時ときは夏なつ、血ちのごと濁にごる毒どく水すゐの

鰐わに住ぬまむ沼ぬまの真ま昼ひる時とき、夢ゆめともわかず、

四十年三月

日に嘆く無量の広葉かきわけて
 ほのかに青き青蓮の白華咲けり。

ここ過ぎり街にゆく者、——

婆羅門の苦行の沙門、あるはまた

生皮漁る旃陀羅が鈍き刃の色、

たまたまに火の布巻ける奴隷ども

石油の罐を地に投げて鋭に泣けど、

この早何時かは止まむ。これやこれ、

饑に墮ちたる天竺の末期の苦患。

見るからに氣候風吹く空の果

銅色のうろこ雲湿润に燃えて

恒河の鱗の脊のごとはらばへど、

日は爛れ、大地はあはれ柚色の

熱黄痘の苦痛に吐息も得せず。

この恐怖何に類へむ。ひとみぎり
 地平のはてを大象の群御しながら
 槍揮ふ土人が昼の水かひも
 終へしか、消ゆる後姿に代れる列は
 こは如何に 殖民兵の黒奴らが
 喘ぎ曳き来る真黒なる火薬の車輛
 掲ぐるは危嶮の旗の朱の光
 絶えず饑ゑたる心臓の呻くに似たり。

さはあれど、ここなる華と、円き葉の
 あはひにうつる色、匂、青みの光、
 ほのほのと沼の水面の毒の香も
 薄らに交り、昼はなほかすかに顫ふ。

幽閉

色濁るぐらすの戸もて

封じたる、白日の日のさすひと間、

そのなかに蠟のあかりのすすりなき。

いましがた、蓋閉したる風琴の忍びのうめき。

そがうへに瞳盲ひたる嬰兒ぞ戯れあそぶ。

あはれ、さは赤裸なる、盲ひなる、ひとり笑みつつ、

声たてて小さく愛しき生の臍をまさぐりぬ。

物病ましさのかぎりなる室のといきに、

をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の囃子、

あはれ、また、嬰兒笑ふ。

ことごと、ひそかなる母のおとなひ
幾度となく戸を押せど、はては敲けど、
色濁る扉はあかず。

室の内暑く悒鬱く、またさらに嬰兒笑ふ。

かくて、はた、硝子のなかのすすりなき

蟬のあかりの夜を待たず尽きなむ時よ。

あはれ、また母の愁の恐怖とならむそのみぎり。

あはれ、子はひたに聴き入る、

珍らなるいとも可笑しきちやるめらの外の一節。

四十一年六月

鉛の室

いんきは赤し。——さいへ、見よ、室の腐蝕に
 うちにじみ倦じつつゆくわがおもひ、
 暮春の午後をそこはかと朱をば引けども。

油じむ末黒の文字のいくつらね
 悲しともなく誦しゆけど、響らぐ声は
 錆びてゆく鉛の悔、しかすがに、

強き薫のなやましき、鉛の室は
 くわとばかり火酒のごとき噎びして
 壁の湿潤を玻璃に蒸す光の痛さ。

ちから
 力なき活字ひろひの淫れ歌、

病める機械の羽たたきにあるは沁み来し
 新らしき紙の刷られの香も消ゆる。

いんきや尽きむ。——はやもわがこころのそこに
 聴くはただ饴えに饴えゆく匂のみ、——
 はた、滓よどむ壺を見よ。つとこそ一人、

手を棚へ延すより早く、とくとくと、
 赤き硝子のいんき罫傾むけそそぐ
 一刹那、壺にあふるる火のゆらぎ。

さと燃えあがる間こそあれ、飜ると見れば
 手に平む吸取紙の骸色
 爛れぬ——あなや、血はしと、と卓に滴る。

真昼

日は真昼——野づかさの、寂寥せきれうの心しんの臓ざうにか、
 ただひとつ声もなく照りかへす硝子がらすの破片くだけ。
 そのほどりWHISKY《ウキスキー》の匂にお蒸むす銀色ぎんいろの内うち、
 声するは、密ひそかにも露吸るひあぐる、
 色赤あかき、色赤あかき花はなの吐息といき……

四十一年十二月

このさんたくるすは三百年まへより大江村の切支丹のうちに忍びかくして守り
つたへたるたつときみくるすなり。これは野中に見いでたり。

天草島大江村天主堂秘蔵

天草雅歌

四十年八月、新詩社の諸友とともに遠く天草島に遊ぶ。こはその記念作なり。

「四十年十月作」

天艸雅歌

角を吹け

わが佳耦よ、いぎともに野にいでて

歌はまし、水牛の角を吹け。

視よ、すでに美果実あからみて

田にはまた足穂垂れ、風のまに

山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。

いざさらば馬鈴薯の畑を越え

瓜哇びとが園に入り、かの岡に

鐘やみて蠟の火の消ゆるまで

無花果の乳をすすり、ほのぼのと

歌はまし、汝が頸の角を吹け。

わが佳耦ともよ、鐘かねきこゆ、野のに下りて
 葡萄樹ぶどうの汁じゆ滴つゆした邑むらを過すぎ、

いざさらば、パアテルの黒くろき袈裟けさ
 はや朝あさの看経つとめはて、しづしづと

見えがくれ棕櫚しゆろの葉はに消きゆるまで、

無花果いちじくの乳ちをすすり、ほのぼのと

歌はまし、いざともに角つのを吹ふけ、

わが佳耦ともよ、起おき来きれ、野のにいでて

歌はまし、水牛すゐぎうの角つのを吹ふけ。

ほのかなる蠟ろうの火ひに

いでや子こら、日ひは高たかし、風かぜたちて

棕櫚しゆろの葉はのうち戦そよぎ冷ひゆるまで、

ほのかなる蠟ろうの火ひに羽はをそろへ

鳩のごと歌はまし、汝が母も。

好き日なり、媪たち、さらばまづ
禱らまし賛美歌の十五番、

いざさらば風琴を子らは弾け、

あはれ、またわが爺よ、なにすとか、

老眼鏡ここにこそ、座はあきぬ、

いざともに禱らまし、ひとびとよ、

さんた・まりや。さんた・まりや。さんた・まりや。

拝めば香炉の火身に燃えて

百合のごとわが壺のうちふるふ。

あなかしこ、鳩の子ら羽をあげて

御龕なる蠟の火をあらためよ。

黒船の笛きこゆいざさらば

ほどもなくパアテルは見えますむ、

さらにまた他の燭をたてまつれ。

あなゆかし、ロレンゾか、鐘鳴らし、
 まめやかに安息あんそくの日を祝ほぐは、
 あな樂し、真白ましろなる羽をそろへ
はと鳩のごと歌はまし、わが子らよ。
 あはれなほ日は高し、風たちて
しゆろ棕櫚の葉のうち戦そよぎ冷ひゆるまで、
 ほのかなる蠟ろうの火に羽をそろへ
はと鳩のごと歌はまし、はらからよ。

を抜けよ

はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、
みだう御堂にははや夕よの歌きこえ、
らふ蠟の火もともるらし、ろを抜ぬけよ。
 もろもろの美果みくだもの実籠こに盛りて、

汝ながはと鴿はとらはた烟はたに下り、しらしらと

歸かへるらし夕ゆふづつのかげを見よ。

われらいま、空そらいろ色の帆ほのやみに

新あらたなる大おほうみ海の香かうろと炬と採り

籠こに炷たきぬ、ひるがへる魚を見よ。

さるほどに、跪ひざまぎ、ひとびとは

目見青まみき上しやうにん人と夜いのに袴はかまり、

捧たげます御みくるすの香かにや酔よふ、

うらうらと咽のどぶらし、歌をきけ。

われらまた祖みおや先まへらが血ちによりて

洗そ礼れがれし仮かなぶみ名な文ぶんの御み経きやうにぞ

主しゆうよ永とほ久くに恵めぐみあれ、われらも、と

鴿はと率ひらつつひら禱いのちらまし、帆ほをしぼれ。

はやも聴きけ、鐘かね鳴なりぬ、わが子こらよ、

御み堂だうにははや夕よべの歌うたきこえ、

蠟ろうの火もくゆるらし、
をろ抜けよ、

汝にささぐ

をみなご
女子よ、

汝なにささぐ、

ただひとつ。

然しかはあれ、汝なも知らむ。

このさんた・くるすは、かなた

檳榔びろうじゆ樹ゆの実みの落つる国、

夕日ゆふひさす白瑛はくはひらう瑯ろうの石はしの階かゝ

そのそこの心の心、——

えめらるど、あるは紅こうぎよく玉よく、

褐くの埴はにやちさか八千層まてこ敷ける真底まてこより、

汝が愛を讚へむがため、

また、清き接吻のため、

水晶の柄をすげし白銀の鍬をもて、

七つほど先の世ゆ世を継ぎて

ひたぶるに、われとわが

採りいでし型、

その型を

汝に捧ぐ、

女子よ。

ただ秘めよ

曰ひけるは、

あな、わが少女、

あまくさ
天 艸の蜜の少女よ。

な
汝が髪は烏のごとく、

な くち こ み あけ
汝が唇は木の実の紅に 没薬の汁滴らす。

わが 鳩よ、 わが友よ、 いぎともに擁かまし。

く ゆり
薫濃き葡萄の酒は

ぎ やまん つぼ も
玻璃の壺に盛るべく、

も たら し し 麝 香 の 臍 は

な
汝が肌の百合に染めてむ。

よ し、 さ あ れ、 汝 が 父 に、

よ し、 さ あ れ、 汝 が 母 に、

た だ 秘 め よ、 た だ 守 れ、 斎 き 死 ぬ ま で、

し ひ た げ
虐の罪の鞭はさもあらばあれ、

あ あ た だ 秘 め よ、 御 くる す の 愛 の 徴 を。

さならずば

わが家の

わが家の可愛ゆき鴿を

その雛を

汝せちに恋ふとしならば、

いでや子よ、

逃れよ、早も邪宗門外道の教

かくてまた遠き祖より伝へこし秘密の聖礫

とく柱より取りいでよ。もし、さならずば

もろもろの麝香のふくろ、

桂枝、はた、没薬、蘆薈

および乳、島の無花果、

如何に世のほひを積むも、——

さならずば、

もしさならずば——

汝なれいかに陳ちんじ泣くとも、あるは、また

護摩ごまた炷たき修しゆし、伴ぼてれん天連てんの救すくひよぶとも、

ああ遂せすべに詮業せんごふなけむ。いざさらば

接吻くちつけの妙たへなる蜜みつに、

女子をみなごの葡萄ぶどうの息いきに、

いで『ころべ』いざ歌へ、わかうどよ。

嗅煙艸

『あはれ、あはれ、深江ふかえの媪おばよ。

髪ほも頬ほも煙艸たばこいろ色なる、

棕櫚しゆろの根うづくに蹲おぼむ媪おばよ。

汝なが持なてる象牙ざうげの壺つぼは

また薰る褐なる粉は

何ぞ。また、せちに鼻つけ

涙垂れ、あかき眼擦るは。』

このときに渡の媼

呻ぶらく。『わが葡萄牙、

こを嗅ぎてわかきは思ふ。』

『さらば、汝は。』『責めそ、さな、さな、

養生を骸はただ欲れ。

さればこそ、この嗅煙艸。』

鵠

わかうどなゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗の鵠、

日のうちにななたび七度八度やたび

潮うしほあび化粧けはひすといふ

伴ばてれん天連ひその秘を少女とめぞ。

地ちになびく髪にはろくわい蘆薈、

嘴はしにまたあかき実みを塗ぬる

淫みだらなる鳥にしあれば、

絶ましろえず、その真白羽ましろはひろげ

乳にふかう香の水したたらす。

されば、子なゆめ近ちかよりそ。

視ほのほよ、持はなつは炎ほのほか、華はなか、

さならずば実みの無い花ち果ゆくか、

兎とにもあれ、かれこそ邪じや法はふ。

わかうどなゆめ近ちかよりそ。

日ごとに

日ごとにわかき姿すがたして
 日ごとに歌ふわが族ぞうよ、
 日ごとに紅あかき実みの乳房ちぶさ
 日ごとにすてて漁あさりゆく。

黄金向日葵

あはれ、あはれ、黄金向日葵こがねひぐるま
 汝みましまた太陽ひにも倦あきしか、
 南国なんごくの空まの真昼まひるを
 かなしげに疲つかれて見ゆる。

一炷

香炉かうろいま

一炷いつすのかをり。

あはれ、火はこころのそこに。

さあれ、その

一炷いつすのけむり、

かの空そらの青みづしき龕かみに。

青き花

南紀旅行の紀念として且はわが羅曼底時代のあえかなる思出のために、この幼き一章を過ぎし日の友にささぐ。

「四十年二、三両月中作」

青き花

そは暗^{くら}きみどりの空に

むかし見^{まほろし}し幻なりき。

青き花

かくてたづねて、

日も知らず、また、夜^よも知らず、

国あまた巡^{めぐ}りありきし

そのかみの

われや、わかうど。

そののちも人とうまれて、

微妙^{いみじ}くも奇^くしき幻^{まほろし}

ゆめ、うつつ、

香こそ忘れね、

かの青き花をたづねて、

ああ、またもわれはあえかに

人の世の

旅路に迷ふ。

君

かかる野に

何時かありけむ。

仏手柑の青む南国

薫る日の光なよらに

身をめぐりほめく物の香

鳥うたひ、
天そらもゆめみぬ。

何時いつの世か

君きみと識しりけむ。

黄金こがねなす髪もたわたわ、

みかへるか、あはれ、つかのま

ちらと見ぬ、わかき瞳ひとみに

にほひぬる

かの青き花。

桑名

夜よとなりぬ、神世かみよに通ふやすらひに

早や門鎖かどぎす古伊勢ふるいせの桑名くわなの街まちは

路みちも狭せに高き屋やづくり音おともなく、

陰森いんしんとして物の隈くまひろごるにほひ。

おほらかに零落れいらくの戸みを瞰下みおろして

愁なげふるがごと月光げつくわうは青に照せり。

参宮さんぐうの衆しゆうにかあらむ、旅たびびとの

ふたりふたりみたり二人三人はさきのほどひそかに過すぎぬ。

貸旅籠かしほたご札ふだのみ白き壁かつづき

ほとほと遠く、物ものごゑの夜風よかぜに消えて、

今ははた数添かずそはりゆく星ほしくづの

天そらなる調しらべやはらかに、地ふは闌ふけまさる。

時まになほ街まちはづれなる老舗しにせの戸

少しあか明りて火あかは路みちへひとすぢ射さしぬ。

行燈あんどうのかけには清めき女の童物わらせのぬ縫ぬふけはひ、

そがなかにたわやの一人髪あげて
戸外すかしぬ。——事もなき夜のしづけさに。

朝

——汽車のなかにて——

わが友よ、はや眼をさませ。

玻璃の戸にのこる灯ゆらぎ、

夜はわかきうれひに明けぬ。

順礼はつとにめざめて

あえかなる友をおもふ。

清しげの髪のそよぎに

笈のいろもほのぼの。

わが友よ、はや眼をさませ。
 かなた、いま白む野のそら、
 薔薇にはほのかに薄く
 董よりやや濃きあはひ、
 かのわかき瞳さながら
 あげぼの夢より醒めて
 わだつみはかすかに顫ふ。

紅玉

かかるとき、
 海ゆく船に
 まどはしの人魚か蹠ける。

美しくしき術しゅつゆふべの夕ゆふに、

まどろみの香油かうゆしたたり、

こころまた

けぶるともなく、

まぼろし
幻まぼろしの黒髪くろかみきたり、

よ
夜よのごとも

わが眼蔽めおほへり。

そことなく

おほくのひとの

あえかなるかたらしおぼえ、

われはただひしと凝視みつめぬ。

夢ゆめふかき黒髪くろかみの奥おく

しゆ
朱しゆに喘あはぐ

こころよく
紅こうぎよく玉たまひとつ、

これや、わが胸より落つる

わかき血の
もゆしたたり
燃る滴。

海辺の墓

われは見き、

いつとは知らね、

薄^{うす}あかるにほひのなかに

夢ならずわかれし一人^{ひとり}、

ものみなは涙のいろに

消えぬとも。

ああ、えや忘る。

かのわかき黒髪のなか、

星のごと濡れてにほひし

そらいろ
天色の勾玉七つ。

われは見ぬ、

漂浪さすらひながら、

見もなれぬ海辺の墓に

うつつにも眠れる一人ひとり

そことなき髪のにほひの

ほのめきも、

ああ、えや忘る。

いま寒き夕闇ゆふやみのそこ、

星のごと濡れてにはへる

そらいろ
天色の露草七つ。

渚の薔薇

紀きの南みなみ、白良しららの渚なぎさ、

荒なだき灘なだ高く碎くだけて

そららとどろ

天そら暗くらう轟とどろくほとり、

ひとならび夕陽ゆふひをうけて

面おもほてり、むらがり咲ける

色あか紅さうびき薔薇ぞうの族ぞうよ。

またた瞬またく間ま、間近まぢかに寄せて

なだ崩なだれうつつ浪なみの穂ほを見よ。

今いましさと滴したたるばかり

激おほなみ瀾なみの飛沫しぶきに濡ぬれて、

弥いやさらに匂におひ閃ひらめく

火あのごとき少女をとめのむれよ。

寄よせ返し、遠とほく消えゆく

塩しほなわ漚なわ暗くらき音ねを聴きけ。

ああ薔薇さうび、汝なれにむかへば
わかき日のほこりぞ躍る。
薔薇さうび、薔薇さうび、あてなる薔薇さうび。

紐

海の霧にほやかなるに
灯ひも見ゆる夕暮のほど、
ほのかなる旅籠はたしの窓に
在あるとなく暮くれもなやめば、
やはらかき私語せごまじり
咽むせびきぬ、そこはかとなく、
火に焼くる薔薇さうびのほひ。

ああ、薔薇さうび、暮れゆく今日けふを

そぞろなり、わかき喘あへぎに

凶はからずも思ひぞいづる。

そは熱あつき夏の渚なぎさ辺へ、

濡ぬれ髪がみのなまめかしさに、

女をみなつと寝ねがへりながら、

みだらなる手して結びし

色あかくつしたひも紅あかき鞆つたの紐ひも。

昼

蜜柑みかんぶねなぎ船ふね風かぜにうかびて

壁かべ白しろき浜はまのあなたは

あたたかに物売ものうりる声こゑす。

波もなき港の真昼、
しろがねさしぐしたは
白銀の挿櫛撓み

いま遠く二つら三つら

水の上をすべると見つれ。

波もなき港の真昼、

また近く、二つら三つら

飛の魚すべりて安し。

夕

あたたかに海は笑ひぬ。

花あかき夕日の窓に、

手をのべて聴くとしもなく

薔薇摘み、ほのかに愁ふ。

いま聴くは市の遠音か、
 波の音か、過ぎし昨日か、
 はた、淡き今日のうれひか。

あたたかに海は笑ひぬ。

ふと思ふ、かかる夕日に

白銀の絹衣ゆるがせ、

いまあてに花摘みながら

かく愁ひ、かくや聴くらむ、

紅の南極星下

われを思ふ人のひとりも。

羅曼底の瞳

この少女はわが稚きロマンチックの幻象也、仮にソフィヤと呼びまゐらす。

美しくしきソフィヤの君。

悲しくも恋しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君。

なになれば日もすがら今日はかく瞑目り給ふ。

美しくしきソフィヤの君、

われ泣けば、朝な夕なに、

悲しくも静かにも見ひらき給ふ青き華——少女の瞳。

ソフィヤの君。

古酒

こは邪宗門の古酒なり。近代白耳義の所謂フアンドシエクルの神経には柑桂酒の酸味に豎
笛の音色を思ひ浮かべ梅酒に喇叭を嗅ぎ、甘くして辛き茴香酒にフルウトの鋭さをたづね、
あるはまたウキスキイをトロムボオンに、キユムメル、ブランデイを嚙喰として鼻音を交
へたるオボイの響に配して、それぞれ匂強き味覚の合奏に耽溺すと云へど、こはさる驕り
たる類にもあらず。黴くさき穴倉の隅、曇りたる色硝子の窓より洩れきたる外光の不可思
議におぼめきながら煤びたるフラスコのひとつに湛ゆるは火酒か、阿刺吉か、又はかの紅
毛の※酩の酒か、えもわかねど、われはただ和蘭わたりのびいどろの深き古色をゆかしみ
て、かのわかき日のはじめに秘め置きにたる様々の夢と匂とに執するのみ。

恋慕ながし

春ゆく市のゆふぐれ、
角なる地下室の玻璃透き

うつらふ色とにほひと
見惚れぬ。——潤るむ笛の音。

しばしは雲の縹と、
灯うつる路の濡色、
また行く素足しらしら、——
あかりぬ、笛の音色も。

古き醋甕と街衢の
物焼く薫いつしか

薄らひ饜ゆれ。——澄みゆく
 紅き音色の揺曳

このとき、玻璃も真黒に
 四輪車軋るはためき、
 獣の温き肌の香
 過ぎりぬ。——濁る夜の色。

ああ眼にまどふ音色の
 はやも見わかぬかなしさ。
 れんほ、れれつれ、消えぬる
 恋慕ながしの一曲。

四十年二月

煙草

黄^きのほてり、夢のすががき、
さはあまきうれひの華^{はな}よ。

ほのに汝^なを嗅^かぎゆくこち、

QRACIO 《キユラソオ》の酒もおよばじ。

いつはあれ、ものうき胸に
痛^{いた}知るささやきながら、

わかき火のほひにむせて

はばたきぬ、快^{けら}楽のうたは。

そのうたを誰かは解^とかむ。

あえかなる罪のまぼろし、——

濃^こき華の褐^くに沁みゆく

愛欲あいよくの千々ちぢのうれひを。

日向葵ひぐるまの日に蒸すにほひ、
 かはたれのかなしき怨言かごと
 ゆるやかにくゆりぬ、いまも
 絶間たえまなき火のささやきに。

かくてわがこころひねもす
 傷むいたともなくてくゆりぬ、
 あな、あはれ、汝なが香かの小鳥
 そらいろのもやのつばさに。

舗石

四十年九月

夏の夜あけのすずしき、
氷載せゆく車の

いづちともなき軋きしりに、
潤うるみて消ゆる瓦斯がすの火。

海へか、路次ろじゆみだれて

大おほうから族らなす鷺がの鳥

鳴きつれ、霧のまがひに

わたりぬ——しらむ舗石しきいし。

人みえそめぬ。煙草たばこの

ただよひ湿しめるたまゆら、

辻なる窓の絵硝子ゑがらす

あがりぬ——ひびく舗石しきいし。

見よ、女が髪のたわめき
 濡れこそかかれ、このとき
 つと寄り、男、みだらの
 接吻——にほふ舗石。

ほど経て窓を閑す音。

枝垂柳のしげみを、

赤き港の自働車

けたたましくも過ぎぬる。

ややあり、ほのに緋の帯、

水色うつり過ぐれば、

纏れぬ、はやも、からころ、

かろき木履のすががき。

驟雨前

ながつき ちんじゆまつり
長月の鎮守の祭

からうじてどよもしながら、
雨もよひ、夜もふけゆけば、
蒸しなやむ濃き雲のあし
をりをりに赤くただれて、
月あかり、稲妻すなる。

このあたり、だらだらの坂、
赤楊高き小学校の
柵尽きて、下は黍畑

四十年九月

こほろぎぞ闇に鳴くなる。
 いづこそやをみなこゑ女声して
 重たげにあまどく雨戸おと繰る音。

わかれ路みち、辻つじの濃霧こぎりは

馬やどののこるあかりに

幻燈げんとうのぼかしのことも

蒸し青あをみ、破やれし土馬車つちばしや

ふたつみつ泥どろにまみれて

ひそやかに影おとを落しぬ。

泥ぬ濁かるみの物あせの汗あせばみ

生なまぬるく、重くき空う気に

新もしき木もく犀せいまじり、

馬うま槽ぶねの臭く気きふけつつ、

懶ものうげのさやぎはたはた

暑^{あつ}き夜^よのなやみを刻^{きざ}む。

足^{あし}音^{おと}ず、生^な血^まの滴^{した}り

しとしととまへを人^{ひと}かけ、

おちうどか、ほたや、六^{ろく}部^ぶか、

背^せに高^{たか}き龕^{みづし}をになひ、

青^{あお}き火^ひの消^けえゆくごとく

呻^{うめ}きつつ闇^{やみ}にまぎれぬ。

生^{なま}騒^{さわ}ぎ野^のをひとわたり。

とある枝^えに蝉^{せみ}は寝^ねおびれ、

ぢと嘆^{なげ}き、鳴^なきも落^おつれば

洞^{ほら}円^{まる}き橋^{はし}台^{だい}のをち、

はつかにも断^きれし雲^{くも}間^まに

月^{つき}黄^きばみ、病^{わら}める笑^{わら}ひす。

夜の汽車の重きとどろき。

凄まじき驟雨のまへを、

黒煙深き峽は

一面に血潮ながれて、

いま赤く人轢くけしき。

稲妻す。——嗚呼夜は一時。

解纜

解纜す、大船あまた。——

ここ肥前長崎港のただなかは

長雨ぞらの幽闇に海づら鈍み、

三十九年九月

悶々もんもんと櫓ぼしけぶるたたずまひ、
 鎖くさりのむせび、帆かのうなり、伝馬てんまのさけび、
 あるはまた阿蘭船おらんせんなる黒奴くろんぼが
 気きも狂くるほしき諸しよごゑに、硝子切がらする音おと、
 うち湿しめり——嗚呼ああ午後七時——ひとしきり、
 落居おちゐぬ騒擾さやぎ。

解纜かいらんす、大船おほいぶねあまた。

あかあかと日暮にちぼの街まちに吐血とけつして

落日らくじ喘あへぐ寂寥せきれうに鐘鳴かねりわたり、

陰々いんいんと、灰色はいいろ重おもき曇くもり日びを

死しを告つげ知らすせはしきに、響こゑは絶たえず

天主てんしゆより。——閻あんたん澹たんとして一一ふたならび列り、

海波かいほの鳴咽おえつ、赤あかの浮標うき、なかに黄きばめる

帆かは瘡ぎやくに——嗚呼ああ午後七時——わなわなとはためく恐怖おそれ。

解纜す、大船あまた。――

黄髪の伴天連信徒蹠跟と

闇穴道を磔負ひ駆られゆくごと

生ぬるき悔の唸順々に、

流るる血しほ黒煙り動揺しつつ、

印度、はた、南蛮、羅馬、目的はあれ、

ただ生涯の船がかり、いづれは黄泉へ

消えゆくや、――嗚呼午後七時――鬱憂の心の海に。

日ざかり

嗚呼、今し午砲のひびき

おほどかにとどろきわたり、

遠^{をち}近^ちの汽笛^{きてき}しばらく

饑^ううるごと呻^{うめ}きをはれば、

柳^{やなぎ}原^{はら}熱^{あつ}き街衢^{ちまた}は

また、もとの沈黙^{しじま}にかへる。

河岸^{かし}なみは赤^{あか}き煉瓦^{れんぐわ}家^や。

牢獄^{ひとや}めく工場^{こうば}の奥^{おく}ゆ

印刷^{いんさつ}の響^{ひびき}たまたま

薄鉄^{はかり}葉^は切^きる鋏^{はさみ}の音^{おと}と、

枢^{ひつぎ}うつ槌^{つづみ}と、鑪^{やすり}と、

懶^{もの}うげにまじりきこえぬ。

片側^{かたがは}の古衣屋^{ふるぎや}つづき、

衣紋^{えもん}掛^{かけ}重^{おも}き恐怖^{おそれ}に

肺^{はひ}やみの咳^{しか}洩^もれて、

饜すえてゆく物のいきれに、
 陰いん湿しつのほひつめたく
 照しり白らみ、人は黙もく坐ざす。

ゆきかへり、やをら、電でん氣き車しゃ
 鉛なまりだつ体たいをとどめて

ぐどぐどとかたみに語り、

鬱うつ憂うの唸うなり重なりげに

また軋きる、熱あつく垂あれたる

ひた赤あかき満まん員ゐんの札ふだ。

恐おそろしき沈し黙じまふたたび

酷こく熱ねつの日ひざしにただれ、

ぺんき塗ぬり褪せめし看かん板ばん

毒どく滴たらし、河か岸しのあちこち

ちぢれ毛げの瘦やせいぬ犬見えて

苦しげくるに肉にくを求食あさりぬ。

油あぶらうレ線路エルの正面まとも、

鉄重てつおもき橋かまへの構かまへに

雲雲ひとつまろがりいでて

くらくらくかがやく真昼まひる、

汗あせながし、車曳ひきつつ

匍匐はふがごと撒水みつまき夫みづまききたる。

軟風

ゆるびぬ、潤うるむ罌粟けしの火は

わかき瞳ぬれいろの濡ぬれいろ色いろに。

三十九年九月

熟視^{みつ}めよ、ゆるる麦の穂の
たゆらの色のつばやきを。

たわやになびく黒髪の
君の水脈^みこそ身に翻^{あふ}れ。――
うかびぬ、消えぬ、火の雫^{しづく}
匂の海のたゆたひに。

ふとしも歎^{なげ}く蝶のむれ
ころりんころと……頬^ほのほめき、
触^ふる吐息^{といき}に纏^{もつ}るれば、
色も、にほひも、つばやきも、

同じ音色^{ねいろ}の摇曳^{ゆらびぎ}に
倦^{うん}じぬ、かくて君が目も。――

あはれ、皐月さつきの軟風なよかぜに
ゆられてゆめむわがおもひ。

大寺

大寺おほてらの庫裏くりのうしろは、
枇杷こがねあまた黄金こがねたわわに、
六月むつきの天てんいろ洩そらるる
路次ろじの隅すみ、竿さをかけわたし
皮交り、襦袢むつきほを乾ほせり。
そのかげに穢むさき姿なりして
面子めんこうち、子らはたはぶれ、
裏店うらだなの洗流ながしの日かげ、

四十年六月

顔青き野師やしの女房ら

首いだし、煙草吸ひつつ、

鈍にぶき目に蕘いらかあふぎて、

はてもなう罵りかはす。

凋しをれたるもののにほひは

溝どぶいた板いたの臭くさ気みまじりに

蒸あつし暑く、いづこともなく。

赤黒き肉屋の旗は

屋根越に垂れて動かず。

はや十時、街まちの沈しじま黙まを

しめやかに沈ちんの香しづみ、

しらじらと日は高まりぬ。

三十九年八月

ひらめき

十月じふぐわつのとある夜の空。
 北国ほつこくの郊野かうやの林檎
 実みは赤く梢こすえにのこれ、
 はや、里くだものとりの果物採は
 影絶えぬ、遠く灯ひつけて
 ただ軋きしる耕かうさく作さくぐるま。
 鬱憂うついうに海うみは鈍にばみて
 闇澹あんたんと氷雨ひさめやすらし。
 灰濁はひだめる暮雲ぼうんのかなた
 血紅けつこうの火花ひばなひらめき
 燦さんとして音おとなく消えぬ。
 沈痛ちんつうの呻吟うめきこの時、
 闇重やしよくき夜色やしよくのなかに

旗赤き異形の列は
 戯けたる広告の囃子
 賑やかに遠くまぎれぬ。

うらがなし、落日の黄金
 片岡の槐にあかり、
 鳴きしきる蝸あはれ
 誰葬るゆふべなるらむ。

玻璃罍

うすぐらき甕のなか、
 瓢状、なにか湛へて、

三十九年八月

とを
十あまり円うならべる
ゆめ
うす
はりびん
夢いろの薄ら玻璃罎。

しづ
もやふる
静けさや、霽の古びを

わうらふ
くゆ
黄蠟は燻りまどかに

といき
照りあかる。吐息そこ、ここ、

あいらく
哀樂のつめたきにほひ。

いま
くわんらく
今しこそ、ゆめの歡樂

ふ
いのち
なみ
降りそそげ。生命の脈は

ゆらぎ、かつ、壁にちらほら

はりす
はりす
玻璃透きぬ、赤き火の色。

三十九年八月

微笑

朧ろうげつ月か、眩まぼゆきばかり

髪あかむすび紅あかき帯して

あらはれぬ、春しゅん夜やの納屋なやに

いそいそと、あはれ、女をみなご子。

あかあかと据すゑし蝋燭ろうそく

薔薇さうび潮さす片頬かたほにほてり、

すずろけば夜霧よぎり火のごと、

いづこにか林檎りんごのあへぎ。

嗚呼ああ愉快ゆらく、朱塗しゆぬりの樽たるの

差口さぐち抜き、酒さけつぐわかさ、

玻璃器ぎやまんに古酒こしゆの薫香かをりが

なみなみと……遠く人ごゑ。

やや暫時、瞳かがやき、

髪かしげ、微笑みながら

なに紅む、わかき女子。

母屋にまた、おこる歡語……

砂道

日の真昼、ひとり、懶く

真白なる砂道を歩む。

市遠く赤き旗見ゆ、

風もなし。荒蕪地つづぎ、

三十九年八月

廃れ立つ礎燃えて
烈々と煉瓦の火気に
爛れたる果実のほひ
そことなく漂湿る。

数百歩、娑婆に音なし。

ふと、空に苦熱のうなり、
見あぐれば、名しらぬ大樹
千万の羽音に塵け、
鈴状に熟る火の粒
潤やかに甘き乳しぶく。
楽欲の渴たちまち
かのわかき接吻思ひ、
目ぞ暈む。

真夏の原に
 ましろ 真白なる砂道とぎれて
 さだう
 また続く恐怖の日なか、
 おそれ
 寂として過ぎる人なし。
 せき

凋落

じやくわうど 寂光土、はたや、おくつき、
 ゆふぐれ 夕暮の古き牧場は
 まきば
 なごやかに光黄ばみて
 うつらちる楡の落葉、
 にれ らくえふ
 そこ、かしこ。——暮秋の大日
 ぼしう おほひ

三十九年八月

あかあかと海に沈めば、

凋落てうらくの市いちに鐘鳴り、

絡繹らくえきと寺門じもんをいづる

老若らうやくの力ちからなき顔、

あるはみな青き旗垂れ

灰濁はいだめる水路すゐろの靄もに

寂寞じやくまくと繋かかる猪木舟ちよきぶね、

店々の装飾かざりまばらに、

磴石いしだたみ ちらほら転る

空からぐるま、寒き石橋。――

鈍にぶき眼めに頭かしらもたげて

黄牛あめうしよ、汝なはなにおもふ。

三十九年八月

晩秋

神無月、下浣すゑの七日しちにち、

病やましげに落日いりひ黄ばみて

晩秋ばんしゅうの乾風からかぜ光り、

百舌もず啼かず、木の葉沈まず、

空高き柿ほづえの上枝を

実はひとつ赤く落ちたり。

刹せつな那、野を北へ人ひと霊たま、

鉦かねうちぬ、遠く死の歌。

君死ゆふべにき、かかる夕に。

あかき木の実

三十九年五月

暗くらきこころのあさあけに、
あかき木この実みぞほの見ゆる。
しかはあれども、昼はまた
君といふ日にわすれしか。
暗くらきこころのゆふぐれに、
あかき木この実みぞほの見ゆる。

かへりみ

みかへりぬ、ふたたび、みたび、
暮あれてゆく幼せの歩あゆ
なに惜をしみさしもたゆたふ。

四十年十月

あはれ、また、野^の辺^べの番^さ紅^{くらん}花
はやあかきにほひに満つを。

四十年十二月

なわすれぐさ

面^{ぎぬ}帕^ぬのほひに洩^もれて、
その眸^{ひとみ}すすり泣^なくとも、——
空^{そら}いろに透^すきて、葉^はかげに
今^{けふ}日も咲^さく、なわすれの花。

四十一年五月

わかき日の夢

水^{みつ}透^すける玻璃^{はり}のうつはに、
 果^みのひとつみづけるごとく、
 わが夢は燃^もえてひそみぬ。
 ひややかに、きよく、かなしく。

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ、
 よひやみのうれひきみにも
 ほの沁^ひむや、青みやつれて
 木のもとに、みればをみなも。
 な怨^{うら}みそ。われはもくせい、

四十一年五月

ほのかなる花のさだめに、
 目^ま見^みしらみ、うすらなやめば
 あまき香^かもつゆにしめりぬ。
 さあれ、きみ、こひのうれひは
 よひのくち、それもひととき、
 かなしみてあらばありなむ、
 われもまた。——月はのぼれり。

一瞥

大^{たい}月^{げつ}は赤くのぼれり。
 あら、青む最^{さい}愛^{あい}びとよ。
 へだてなき恋の怨^か言^ごは

三十九年四月

見るが間に朽ちてくだけぬ。

こは人か、

何らの色ぞ、

凋落の鶺鴒か、鶺鴒か。

後より、

冷笑す、あはれ、一瞥。

我、こころ君を殺しき。

旅情

——さすらへるミラノひとのうた。

零落の宿泊はやすし。

三十九年七月

海ちかき下層したの小部屋こべやは、
 ものとなき鹹しほの汚よごれに、
 煤すすけつつ匂におふ壁紙かべがみ。
 ひろしげ
 広重ひろしげの名をも思出おもひづ。

ほどこちかき庖厨くりやのほてり、
 絵草子ゑぞうしの匂におにまじり
 物ものあぶる騒さわぎこもこも、
 焼酎せうちゆうのするどき吐息といき
 針はりのごと肌刺はださす夕ゆふべ。

ながむれば葉柳はやなぎつづき、
 いろがらすぬ
 色硝子いろがらす濡ぬるる巷こうぢを、
 はま
 横浜はまの子が智慧ちゑのはやさよ、
 しなれうり
 支那料理しなれうり、よひの灯影ほかげに

みだらうたあはれに歌ふ。うた

ややありて月はのぼりぬ。

清らなる出窓でまどのしたを

からころと軋きしむ櫓ろの音おと。

鉄てつ格子かくしひしとすがりて

黄こがね金がみ髪がみわかきをおもふ。

数かずおほき罪つみに古ふるりぬる

初はつこひ恋こひのうらはかなさは

かかる夜よの黒くろき波なみ間まを

舟ふなかせぎ、わたりさすらふ

わかうどが歌うたにこそきけ。

色いろふかき、ミラノのそらは

ひのもと
日本のそれと似たれど、

ここに於て摘むによしなき

ジエルソミ、
素馨、海のあなたに

くちつけ
接吻のかなしきもあり。

国を去り、昨きのにわかれて

逃のがれ来し身にはあれども、

なほ遠く君をしぬべば、

ほうほう……と笛はうるみて、

いづらへか、黒くろ船ふねきゆる。

廊下らうかゆく重あしき足音おと。

みかへれば暗くらきひと間まに

残のこる火は血のごと赤く、

腐くされたる林檎りんごのほひ、

そことなく涙をさそふ。

柑子

蕭しめやかにこの日も暮くれぬ、北国きたくにの古ふるき旅籠屋はたごや。
 物焙ものあぶる炉いろりのほとり頸垂うなじれ愁うれひしづめば
 漂浪さすらひの暗くらき山川やまかはそこはかと。——さあれ、密ひそかに
 物ゆかし、わかき匂におひのいづこにか濡ぬれてすずろぐ。

女めあるじは柴折しばり燻くすべ、自在じざい鍵低かぎひくくすべらし、
 鍋なべかけぬ。赤あから顔かほして旅語たびる商人あきうど人ひとふたり。
 傍かたへより、笑わらみて静しずかに籠かたみなる木きの実み撰えりつつ、
 家いへの子こは卓しよくにならべぬ。そのなかに柑子かうじの匂におひ。

三十九年九月

ああ、柑子かうじ、黄金こがねの熱味ほてりか嗅かぎつつも思おもひぞいづる。
 晩秋おそあきの空そらゆく黄雲きんも、烟はたのいろ、見る眼めのどかに
 夕風ゆふなぎの沖おきに帆ふかあぐる蜜柑みかんぶね、暮くれれて入いる汽笛ふえ。
 温ぬかき南みなみの島の幼子をさなこが夢ゆめのかずかず。

また思おもふ、柑子かうじの店たなの愛想あいそよき肥満こえたる主婦あるじ、
 あるはまた顔かほもかなしき亭つれあひ主なの流ながす新内しんない、
 暮くれれゆけば紅あかき夜よの灯ひに蒸むし薰くゆる物の香かのなか、
 夕餉ゆふげどき時まじ、街まちに入り来くる旅人りょじんがわかき歩あみを。

さては、われ、岡おかの木こかげに夢心ゆめこころ地ち、在ありし静しずけさ
 忍しのばれぬ。目籠めがたみかか擁かかへ、黄金こがね摘つみ、袖そでもちらほら
 鳥とりのごと歌うたひさまよふ君きみききて泣なきにし日ひをも。――
 ああ、耳みみに鈴すずの清すずしき、鳴なりひびく沈黙しじまの声音いろうね。

柴しばはまた音おとして爆はぜぬ、燃もえあがる炎ほのほのわかさ。
 ふと見れば、鍋の湯けぶり照り白らむ薫かをりのなかに、
 箸とりて笑ゑらぐ赤ら頬ほ、夕餉ゆふげも盛あるじる主婦、家の子、
 皆、古きき喜劇きげきのなかの姿すがたなり。涙なみだながるる。

三十九年五月

内陣

ほのかなる香かうろ炉ろのくゆり、
 日のにほひ、燈みあかし明あかしのかげ、——

文ふづき月のゆふべ、蒸くゆし薫くゆる 三十三間堂さんじふさんげんだうの奥おく
 空そらいろ色いろしづむ 内陣ないぢんの闇やみほのぐらき 静せいじやく寂じやくに、

せんいつたい、くわんぜおん
 千一体の観世音かきなり立たす香の古び
 いと蕭やかに後背のにぶき列ぞ白みたる。

いづちとも、いつとも知らに、
 かすかなる素足のしめり。

そと軋むゆめのゆかいた
 なよらかに、はた、うすらかに。

ほのめくは髪のかなよびか、
 衣の香か、えこそわかたね。

をみなご かなほ
 女子の片頬のしらみ
 忍びかの息の香ぞする。

舞ごろも近づくなべに、
うつらかにあかる薄闇。

初恋の燃ゆるためいき、
帯の色、身内のほてり。

だらりの姿おぼろかになまめき薫ゆる舞姫の
ほのかに今したたずめば、本尊仏のうすあかり
静かなること水のごと沈みて匂ふ香のそらに、
仰ぐともなき目見のゆめ、やはらに涙さそふ時。

葦より鴿か立ちけむ、
はたはたとゆくりなき音に。

ふとゆれぬ、長の振袖

かろき緋ひのひるがへりにぞ、

ほのかなる香炉かうろのくゆり、

日ひのほひ、燈明みあかしのかけ、——

もろもろの光はもつれ、

あな、しばし、闇にちらぼふ。

懶なき島

明けぬれどもぬるうし。温ぬるき土つちの香を

軟なよかぜ風かぜゆたにたただ懈たゆく揺ゆり吹ふくなべに、

あかがねたはれの淫たはれの夢ゆめゆるのろと

四十年七月

寝惚ねほれて醒さむるさざめ言い、起たつものうし。

眺なむれどもものうし、のぼる日ひのかげも、
 おおうなぼら
 大海原おほうなぼらの空燃もえて、今日けふも緩ゆるゆる
 たて
 縦たてにのみ湧わくなる雲うの火ひのはしら
 おも
 重おもげに色いろもかはらねば見るものうし。

行いきぬれどもものうし、波なみののたくりも、
 たゆ
 懈たたき砂すなもわが悩なやものうければぞ、
 あはうじり
 信あ天翁あはうじりもそろもそろの吐息といきして
 ひねもす
 終ひ日ひうたふ挽歌もがりうたきくものうし。

寝ねそべれどもものうし、円まろに屯たむろして
 しやうがくばう
 正覚坊しやうがくばうの痴しれごこち、日ひを嗅かぎながら
 女めらとなすこともなきたはれごと、

かくて抱けど、飽あきぬれば吸ふものうし。

貪むさぼれどもものうし、椰やし子の実みの酒も、

あか裸はだかなる身の倦たるさ、酌くめども、あほれ、

懶をこた怠りの心の欲よくのものうげさ。

遠とほ雷いかづちのとどろきも昼はものうし。

暮れぬれどもものうし、甘き髪かみの香も、

益えうなし、あるは木きを擦すりて火ともすわざも。

空ひだるけ腹はらの心は暗くらきあなぐらに

蝮はみのうねりのにほひなし、入れどもものうし。

ああ、なべてものうし、夜よるはくらやみの

濁なれる空そらに、熟うみつはり落おつる実みのごと

流すばるほし星ほし血ちを引き消くゆるなやましさ。

ひとり
一人ならねど、とろにとろ、寝れどもうし。

灰色の壁

灰色はいいろの暗くらき壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁の色いろ。

臘月らふげつの十九日じふくにち、

丑満うしみつの夜よの館やかた

龕みづしめく唐銅からかねの櫃ひつの上うへ、

燭青しよくうまじろがずひとつ照てる。

時にわれ、朦朧もつろうと黒衣こくえして

天鵝絨びろうどのもの鈍にぶき床ゆかに立ち、

ひたと身は鉄てつの屑くず

四十年十二月

磁石にか吸はれよる。

足はいま釘つけに痺れ、かの
黄泉の扉はまのあたり額を圧す。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

暗澹と燐の火し

奈落へか虚する。

表面ただ古地図に似て煤け、

縦横にかず知れず走る罅

青やかに火光吸ひ、じめじめと

陰湿の汗うるみ冷ゆる時、

鉄の気はうしろより

さかしまに髪を梳く。

はと竦む節々の凍る音。

生きたるは黒漆の瞳のみ。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

熟視む、いま、あるかなき

一点の血の雫。

朱の鈍み星のごと潤味帯び

光る。聞く、この暗き壁ぶかに

くれなるの鼓うつ心の臓

刻々にあきらかに熱り来れ。

血けぶり。刹那ほと

かすかなる人の息。

みるがまに罅はみなつやつやと

金髪ちすぢの千筋なし、さと乱る。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

なほ熟視む。……髣髴と

浮びいづ、女の頬

大理石のごと腐れ、仰向くや

鼻冷えてほの笑ふちひさき齒

しらしらと薄玻璃の音を立つる。

眼をひらく。絶望のくるしみに

手はかたく十字拱み、

みだらなる媚の色

きとばかり。燭の火の青み射し、

銀色の夜の絹衣ひるがへる。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

『彼。』とわが憎悪心

むらむらとうちふるふ。

一 齊に冷血のわななきは

釘つけの身を逆にめぐり刺す。

ぎくと手は音刻み、節ごとに

機械のごと動く。いま怪し、

おぼえあるくらがりに

落ちちれる埴と鏝。

つと取るや、ひとつ当て、左より

額をまづひしひしと塗りつぶす。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

朱のごとき怨念は

燃え、われを凍らしむ。

刹那、かの驕りたる眼鼻ども

胸かけて、生ぬるき埴の色

ひと息に鏝の手に葬られ

生きながら苦しむか、ひくひくと

うち皺む壁の罅、

今、暗き他界より

凄きまで面変り、人と世を

呪ふにか、すすりなき、うめきごと。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

悪業の終りたる

時に、ふとわれの手は

物握るかたちして見出さる。

ながむれば埴はにあらず、鏝こてもなし。

ただ暗き壁の面冷おもひえびえ々と、

うは湿りしめ、一点いつてんの血ぞ光る。

前さきの世の恋か、なほ

骨髓こつずゐに沁みわたる

この怨恨うらみ、この呪咀のろひ、まざまざと

人ひとり幻影まぼろしに殺したる。

灰色はひいろの暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁の色。

臘月らふげつの十九日、

丑満うしみつの夜よの館やかた。

龕みづしめく唐銅からかねの櫃ひつの上うへ

燭青しよあをうまじろがずひとつ照る。

時になほ、朦朧もうろうと黒衣こくえして

天鵝絨びろうどのものにぶき床ゆかに立ち、
 わなわなと壁熟視みつめ、
 ひとり、また戦慄せんりつす。
 掌てひらけば汗あせはあな生なまなまと
 さながらに人間にんげんの血のほひ。

失くしつる

失くなしつる。

さはあるべくもおもはれね。

またある日には、

探さがしなば、なほあるごともおもはるる。

色青き真珠しんじゆのたまよ。

四十一年七月

装幀	石井柏亭
「エツキスリプリス」及「幼児磔殺」	石井柏亭
挿画『澆季』	石井柏亭
挿画『真昼』	山本 鼎
私信『四十一年七月廿一日便』	太田正雄
挿画『硝子吹く家』	石井柏亭
扉絵及欄画十葉	石井柏亭
彫版	山本 鼎

青空文庫情報

底本：「白秋全集」 二 岩波書店

1984（昭和59）年12月5日発行

底本の親本：「邪宗門」 易風社

1909（明治42）年3月15日発行

入力：kompass

校正：今井忠夫

2003年11月24日作成

2005年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

邪宗門

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>